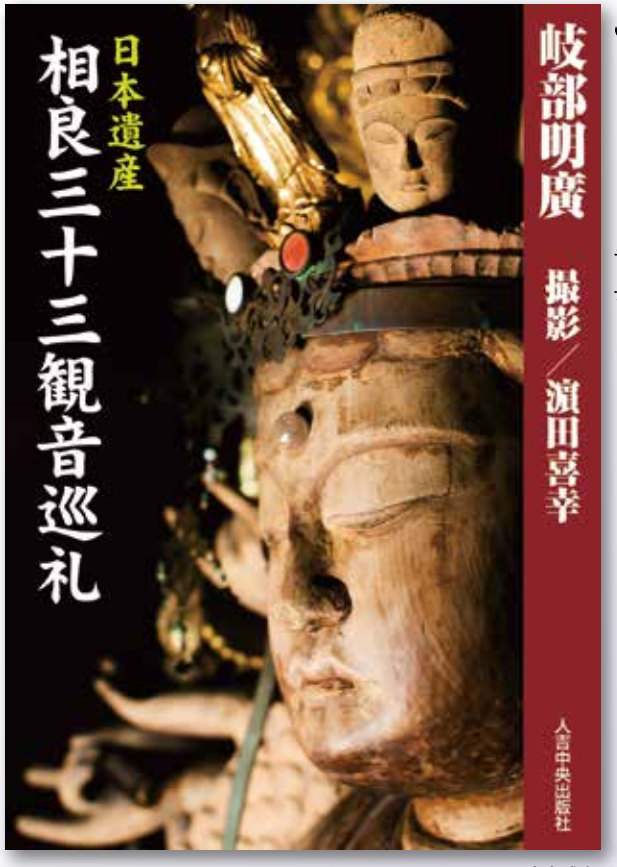
月刊くまがわ春秋 第30号 2018年9月15日発行
企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社 TEL 0966-23-3759／FAX 0966-23-3759
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 http://www.hitoyoshi.co.jp/ info@hitoyoshi.co.jp

また、巡礼の旅に出よう。

相良三十三観音と人吉球磨の
「日本遺産」を熱く語った
ずしりと重いガイドブック



■A5判／並製本／424頁／オールカラー
■定価2,000円（+税）送料200円

人吉球磨の書店
外山胃腸病院で取扱い中。
Amazonでも購入できます。

目次

第1章 観音さまベストテン巡礼
第2章 古典的江戸時代コース巡礼
第3章 ぶらり旅巡礼
第4章 健脚高齢者コース巡礼
第5章 健脚若者コース巡礼
第6章 奥球磨コース巡礼
第7章 千手観音巡礼
第8章 十一面観音巡礼
第9章 如意輪観音巡礼
第10章 隠れ念仏巡礼
第11章 御詠歌ベストシックス巡礼
第12章 伝説を楽しむ巡礼
第13章 墓から歴史を楽しむ巡礼
第14章 脇役を楽しむ巡礼
第15章 山頭火と巡礼
第16章 神社廻りと巡礼
第17章 夏目友人帳聖地巡礼
第18章 お彼岸でない日の巡礼
第19章 「須恵村の女たち」を楽しむ巡礼
第20章 人吉温泉と巡礼
第21章 国指定重要文化財を楽しむ巡礼
第22章 球磨川・川辺川を楽しむ巡礼
第23章 隠れキリシタン巡礼
—巻末付録—
・相良三十三観音霊場一覧
・相良三十三観音巡礼地図

発行元 〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号
TEL・FAX0966-23-3759 info@hitoyoshi.co.jp 人吉中央出版社

定価540円 本体500円

雑誌 81779—09-8

4910817790987
00500

流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2018 9 第30号

ジャーナリスト伊勢戸明

「肥薩線大畑駅にレストランオープン」（9月8日、人吉市） © 松本 学

最近のおもな出来事

8月15日（水）
▽第64回人吉花火大会
8月17日（金）
▽夏休み子どもイベント「列車に乗って鉄道遺産散策」
▽多良木町ゑびす夏祭り「盆踊り・花火大会」
8月19日（日）
▽夏休みおどんがプラモコンテスト作品展（～26日、あさぎり町免田ポッポー館）
8月24日（金）
▽第34回にしき夏まつり
▽第12回球磨川音楽祭 with 木野雅之（あさぎり町須恵文化ホール）
8月25日（土）
▽くまがわカップカヌー大会（くま川下り人吉発船場）
▽第72回犬童球渓顕彰音楽祭個人コンクール
▽第12回球磨川音楽祭 with 木野雅之（ひとよし森のホール）
▽第27回日本一の大鮎釣り選手権大会（球磨村一帯）
9月1日（土）
▽平成30年度人吉球磨の民謡全国大会（～2日、人吉市カルチャーパレス）
9月8日（土）
▽人吉下球磨消防組合「救急フェア2018」（同組合中央署）
▽第54回球磨郡青年団協議会文化祭（～9日、あさぎり町須恵文化ホール）

今月の一言

『文読む月日』（レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳）より

貪食は、一番一般的な罪悪である。われわれがそれに気づかないのは、われわれのほとんど全部がその罪に陥っているからである。

表紙写真

肥薩線大畑駅にレストランオープン

山あいの無人駅、大畑駅に9月8日、フレンチレストラン「LOOP」がオープンした。明治42年築の旧保線詰所を改装し囲炉裏風のインテリアを実現、フランスで修業した中務雅章シェフが腕をふるう。オープン初日は小雨の降るなかであったが、独特の風情を醸し出していた。（松本 学／編集部）

本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

9月（第30号）目次

巻頭言「住んではいけない」宮原信晃…2
第2回さかもと国際児童画展…3
「子どもたちからのプレゼント」上村美鈴…4
山頭火と歩く…6
「駅・ものがたり」連載を終えて　松本晉一…14
連載「駅・ものがたり」を読んで」福井　弘…17
肱川の水害から考える②　つる詳子…18
「七夕綱」芦北町岩屋川内地区…23
くまがわの神さん仏さん㉕ 宮原信晃…26
柳人があじわう漱石俳句㉚ いわさき楊子…29
建築みてある記㉕「鶴之湯旅館」森山　学…30

特集・ジャーナリスト伊勢戸明

9月9日創刊の意味…43
伊勢戸明の仕事…44
「球磨川と短歌を愛した伊勢戸さん」宮原信晃…49
書評　高橋ユリカ著『川辺川ダムはいらない』森 明香…50
「週刊ひとよしと私の二〇年」木﨑康弘…53

新・日曜釣り師心得⑧　宮原赤竿…35
あがっ段㉗ 上杉芳野…36
エンブリー・ノート ③三十三観音巡り…38
記憶の落ち穂㉙ 坂本福治…42
「小さなメディアの大きな仕事」坂本桃子…56
「これがクライマックス？」鶴上寛治…58
「虫の世界」武井京子…59
人吉藩の大水害②　尾方保之…60
鶴鴒短歌会　八月詠草…65
倉敷便り㉑　原田 正史…66
漢和字典は面白い⑬　鶴上寛治…69
天草の「五足の靴」⑤　冨永和信…70
小説・相良清兵衛⑨　山口啓二…72
「老いらん」道中⑥　石田藤幸／益田啓三…77
方言を味わう㉖　前田一洋…78
いもご短歌会…80
くまがわ学習塾㉑…81
外来語から学ぶ英単語㉚　藤原　宏…82
ひろしの…げっかん・ぎひょう…82
おっとわっとあすび㉚　松舟博満…83
くまがわ学習塾㉚の答え…84
今月の秀句⑲　永田満徳…85

巻頭言

住んではいけない

毎年ヒヤヒヤものだった九州への台風上陸だが、いつの間にかその経路が北上した。ここ数年九州が台風銀座といわれたことも忘れそうになっている。

今回の台風21号は四国の徳島に上陸し、関西圏のど真ん中を日本刀を振り回すように暴れ回って日本海へ逃げ去った。その痕跡は大都会の弱点を暴露するかの様に、近年に迫るオリンピックの開催をも危うくさせる衝撃的な場面を見せつけた。関西空港が正にそれだ。高潮のために滑走路に海水が流れ込み、荷物運搬車やその他の施設も被害を受けた。しかもこともあろうに海上に浮かぶ空港と陸をつなぐ連絡橋にタンカーが激突するという大惨事。あれほど、テレビやラジオにインターネットでも唸る様に「台風により危険が差し迫っています」と日本中から情報が流れたはずなのに、海のタンカーが道路の橋に自らがぶつかりに来るとは何としたものか。

鹿児島県は十島村。そこは別名トカラ列島という島々で明治の初め、せごどんがいた頃に薩摩藩が地籍調査をした。それぞれの島に何名が住んで家屋がどれだけという簡単な調査であったが、その調査を昭和にも行っていた。その内容が驚きの数字である。江戸の終わりから明治の頃の戸数と昭和の時代の戸数が同じなのだ。昔々から、島の人間は危ない場所には家を建てず、安全な場所だけに家を建てていた。そう戸数が同じなのだ。トカラ列島は現在でも噴煙を上げる島もあり、台風も地震も、風速50ｍも日常茶飯事なのだ。だが、この島々では人は死なない。今回の18、19号では3軒の屋根が飛んだとニュースに出たが死者はない。「3匹の子ぶた」のように長男のワラ屋根が飛んでも次に逃げ込める避難場所があるのだ。

日本中、悲しい事ばかりがおこる。「新しい砂防ダムが出来たから安心して新築の家を購入した」と報道で見た。「そこは危ないから砂防ダムが出来たのだから、そこに住んではいけない」と親も親戚も役所も教えてくれる、そんな町に住みたいものだと願っている。

（宮原信晃）

テーマは「わたしからのプレゼント」

第2回さかもと国際児童画展

9月8日にオープニングセレモニー開催

道の駅坂本、坂本コミュニティーセンター、温泉センター・クレオンの3ヶ所で開催。9月8日のオープニングセレモニーは多数の来場者で賑わった。

夕葉保育園児の和太鼓

櫻劇場の紙芝居

コマツじいちゃんの手品

太極拳

ピカケスタジオのフラダンス

イベントを楽しむ子どもたち（上）

綿菓子を頬ばる子（左）

子どもたちのプレゼントが、あなたの心に届きますように

上村美鈴

正式名称は「熊本地震復興チャリティ 八代市さかもと国際児童画展」。多くの方々の温かいご支援をいただき、今年は第2回目です。

テーマ「わたしからのプレゼント」には、応募数583点が集まりました。共催「横浜青葉国際児童画展」の313点とあわせて、世界17カ国896点を3会場に分けて一斉に展示します。

子ども達の発想は無限です。いかにも可愛らしい家族への美しい花束、困っている人に家を、おばあちゃんに杖や膝掛け、ペットに素敵なベッド、お友達には一緒に遊ぶ、虫をあげる、気持ちはとってもわかるけど絵柄がぐちゃぐちゃな絵、綺麗なクリスマスツリー（タイ）などがあるかと思えば、自分に大好きな西瓜を（中国）、世界の人たちにタトゥ（オランダ）、不思議な変顔を（オランダ）など、お国柄か、とんでもなくユニークなプレゼントもあります。

用紙の大きさの指定からはみだした大きな絵、テーマをまったく無視した愉快な絵などもあり、実行委員会では考えあぐねた結果、応募してくれた心意気にお応えして、お約束通り全点展示することにしました。もう子ども達には脱帽です。世界の子ども達の1200のプレゼントが、来場者のあなたの心に届きますように。

9月8日のオープニングセレモニーは朝9時半からメイン会場の「道の駅坂本」の大広間で開催。

夕葉保育園児の和太鼓、くまモンと一緒に踊るピカケスタジオのフラダンス、武術の名演太極拳、熊本市からは櫻劇場の紙芝居、コマツじいちゃんの手品と、趣向を凝らしたアトラクションで、来場者のみなさまに楽しんでいただきました。ユネスコ世界文化遺産となった八代妙見祭の亀蛇の子ガメさんが道の駅坂本で特別展示し、9日からは坂本コミュニティセンターに移して展示しています。

球磨川の翡翠色の流れ、風に追われる対岸の木々の白い葉裏、川縁に茂る夏草の匂い、遠く聞こえるSLの汽笛、坂本町に美しい初秋がやってきます。どうかお誘い合わせの上、お越し下さい。

被災地に笑顔が戻りますように、子どもたちの未来が幸せでありますように、今を生きる人たちの願いが叶いますように、「さかもと国際児童画展」がずっと続きますように、そしてこの地でいつか暮らせますように、と願いながら、今日も私は坂本町へ車を走らせています。

【うえむら・みすず／八代市】

第２回「八代市さかもと国際児童画展」

2018年9月8日（土）～9月17日（日）

◎会場【入場無料】
①道の駅坂本　②坂本コミュニティセンター　③温泉センター・クレオン（木曜休）
◎主催：八代市坂本住民自治協議会　◎共催 NPO 法人横浜青葉国際交流の会
◎後援：八代市教育委員会／公益財団法人宮嶋利治学術財団／八代青年会議所
八代市立坂本中学校 PTA ／八代市立八竜小学校 PTA ／東京球磨川会
◎問合せ：坂本住民自治協議会 0965-45-2228（9:00～17:00）

山頭火と歩く

この小論は山頭火論ではない。昭和5年9月9日に彼は「行乞」の旅をはじめたが、問題はその「9月9日」にある。その日に伊勢戸明はこだわった。それゆえに9月9日にはじまる山頭火の、八代から人吉にいたるまでの旅に小論は注目する。山頭火は伊勢戸も注目した俳人で、そのことも小論は意識している。

1. 八代

昭和5年（1930年）9月9日、山頭火は、宇土を経由して、汽車で八代駅に到着。同駅近くの八代町萩原塘・吾妻屋に投宿した。そのとき山頭火48歳であった。吾妻屋の宿賃は35銭で、山頭火は吾妻屋を「中」と評価した。

到着直後、八代町を行乞。夜は、酒を飲み、餞別のゲルト（お金）をのみほし、同宿の4人と無駄話をしている。宇部の乞食爺さんの話と、球磨の百万長者の欲深い話が面白かったという。

吾妻屋は、その後、「岩越屋」に屋号を変え、戦争直後まで宿屋を営んでいた。屋号変更の時期は確認できない。岩越屋が吾妻屋であったことを知っている人は、現在では、ほとんどいない。八代駅前の喫茶店の出水晃さんによると、出水さんも岩越屋が吾妻屋であったとは長くご存じなかったが、同地の古老から教えていただいたとのことであった。出水さんは岩越屋についての記憶はあり、2階建て狭い階段の宿屋だったという。

吾妻屋の近辺は材木問屋・業者が並ぶ地区である。川舟の舟頭、水夫（かこ）、筏師が利用する飲食店が集中する場所でもあった。吾妻屋はそうした場所の一画に位置する。写真は、吾妻屋跡地付近から八代駅方面を写したものである。吾妻屋の場所については、出水さんのほか、作家・前山光則さんからご教示をいただいた。お二人に深く感謝申し上げる。

吾妻屋跡地付近から八代駅方面を望む

おりや句会（9月9日）

昭和10年の八代駅

山頭火から5年後の昭和10年にエンブリーが八代駅を利用している。「八代は、熊本の南二時間の小都市である。ここで列車を乗り換え、人吉行の列車に一時間待ちあわせる。この時間は多くの旅行者は大きな手荷物をまとめてすわっており、母親は赤ん坊に乳を飲ませながら辛抱強く座っている。若干の冒険的な旅行者は、町に出かけて小さな食堂で酒かビールを飲みながら時間を過ごす。そこは通り過ぎの客に食事を出すがサービスは悪く、ウェートレスは決して美人ではない。八代における不便な待ち合わせは、人吉への二時間の豪しゃな景色で補われない」と書いている（『須恵村』25頁）。このようにエンブリーの評価は厳しい。エンブリーのいう「小さな店」は、おそらくは、山頭火が投宿した吾妻屋近くの飲み屋街の店のひとつを指すであろう。

2. 日奈久

翌10日、山頭火は午前中に八代町を行乞。その後、3里（約12キロ）を歩いて日奈久町に向かった。そのとき肥薩線は完成していたが、山頭火は肥薩線沿いでなく、江戸時代の相良藩主と同じく薩摩街道沿の日奈久に向かった。その理由は知る由もないが、山頭火にとっては、日奈久は当初から予定していた土地であった。彼は場所も行先もきめずに放浪する人ではなかった。

山頭火は9月10日から12日までの3日間、日奈久の

昭和25年ごろの日奈久温泉の様子
（撮影／麦島勝）

織屋に投宿した。日奈久は有名な温泉地で、山頭火もそれを知っていたであろう。八代町は1泊しただけであった。山頭火は「重い足をひきづって日奈久へ」と書いた。

9月11日の午前に行乞をした。しかしながら、山頭火はほとんどの時間を、身体を休めたり同宿の若者と活動（映画）を見たりして過ごしている。「あんまりいろ〳〵な事が考えさせるから」と彼は言っているが、精神的・肉体的に疲労していたというよりも、執筆（表現）活動前には誰でもそうであるように、休憩の形をとりながら思考を整理していたように思える。

現在の織屋内部

日奈久夢倉庫前

山頭火は織屋を気にいったようで、「此宿は夫婦揃って好人物で、一泊四十銭では勿体ないほどである」と評している。彼のいう「夫婦」は田中市次・ジエの二人である。市次さんは人力車引を生業にした。宿屋はジエさんが担っていた。お二人がなくなったあと、親戚の人が織屋を平成2年まで営業した。最後の客は老齢の研ぎ師で、そのとき宿泊料は650円であった。

日奈久では、毎年、「9月は日奈久で山頭火」のタイトルでさまざまなイベントを実施している。9月1日には、同倉庫跡でオープニング・セレモニーが開催された。

3. 佐敷

9月13日、山頭火は織屋を朝8時に出発し1里ばかり（約4キロ）歩き、二見で汽車に乗った。現在の「肥後二見駅」である。同駅周辺を散策したが山頭火の気配は感じなかった。それにしても、なぜ、わずか1里しか歩かず、直ぐに汽車を利用したのであろうか。厳しい山の連なる赤松太郎を避けたのだろうか。それとも「疲れていた」のか。当時、彼は脚気を患っていたが、それが原因だろうか。いずれにせよ「歩く」ことを強調しつつも、山頭火は意外に歩いていない。

山頭火は佐敷駅で降り、「川端屋」に泊まった。川端屋について「40銭、上」とした。「川端屋」は佐敷川のそばにあった（佐敷川左岸）。佐敷駅から1キロ余り歩かなければ川端屋にはたどり着けない。

薩摩街道と佐敷川が並行している地区にある。そこを歩いていると病院がある。川端屋はその病院の駐車場の一画にあった。そこから200メートルほど佐敷川を上れば左岸に山頭火の句碑が建立されている。薩摩街道沿の勝延寺の裏手といった方がわかりやすいかもしれない。入院患者さんのいる病院である。そえゆえ、その場所については、これ以上の説明を差し控える。

日奈久温泉と十条製紙坂本工場

日奈久温泉は有名な歓楽地で周辺地域からの多くの客で賑わった。たとえば、旧坂本村の製紙工場（十条製紙坂本工場）の労働者もよく利用した。タクシーでなくハイヤーを利用して、坂本から日奈久に遊びにいった。工場指定の旅館もあった。随分お金を使ったのであろう。製紙工場の給料日には日奈久温泉の女将たちが代金を給料から取り上げるために工場の門前に並んだ。昭和30年代までその光景がみられた。ついでながら坂本工場は人吉温泉にも指定旅館を有していた。

川端屋跡

山頭火の句碑

肥後二見駅

4. 人吉街道

佐敷から人吉街道を歩き、山頭火は球磨川に向かった。そのことに異論の余地はない。問題はその先にある。なぜ、鹿児島の方向に向かわず人吉に向かったのかという問題と、佐敷から球磨川にどの経路を利用して出たのかという問題である。前者は答えようがないが、後者も単純ではない。球磨川に出る道は複数あって、どの道を選択したかは、それなりに意味をもつ。たとえば、佐敷から球磨川までの距離の問題がある。そこで計算してみた。最短でも20キロ近くある。佐敷―球磨川には汽車はなく歩くほかない。そのなかで行程として一番可能性があるのは、人吉街道を通り、大坂間を経由して、一勝地駅で汽車に乗り、そのまま人吉駅までいく場合であるとの結論に達した。彼は次のように記している。

「球磨川づたいに五里歩いた。水も山もうつくしかった。筧の水を何杯飲んだことだろう。一勝地で泊まるつもりだったが、汽車でここまで（人吉）来た。やっぱりさみしい。さみしい」。

深く考えないと「球磨川沿いを五里（20キロ）歩いた」と誤解しそうな記述である。じっさい、そのように誤解している人もいる。その理解によれば、佐敷から球磨川まで20キロ近く歩き、球磨川にでてから更に20キロ歩いたことになる。しかし、彼はその日に人吉で郵便局に行き、行乞もしているのである。佐敷―球磨川間は一種の峠越えであることも考慮しなければならない。しかも彼は脚気であった。じっさいに歩いてみれば、彼が球磨川沿いを五里歩いていないと直ぐに気づくであろう。彼は佐敷から球磨川沿いの駅（たぶん、それは一勝地駅）まで歩き、そのすべてを「五里」と記したと考える。

5. 人吉

山頭火は人吉へと急いだ。その理由は「さびしかった」からである。人吉到着早々、郵便局に向かい、留置の来信7通を受け取り、「友の温情はなによりも嬉しい」と書いている。「留置の手紙」である。この一文だけからも彼が、事前に、人吉行を友人たちに知らせていたことが分かる。友人・知人との縁を彼は断ち切ってはいない。酒もやめられなかった。

「一刻も早くアルコールとカルモチン（鎮静催眠薬）を揚棄しなければならない、アルコールでカモフラージュした私はしみじみ嫌になった、アルコールの仮面をはなれては存在しえないやうな私ならばさっそくカルモチンを二百瓶飲め。」

このように書きつつ、山頭火は多くの句を残した。八代・日奈久・佐敷、人吉街道を歩くなかで頭が整理されたのであろう。そのいくつかを彼は九州日日新聞で発表した。それらの句について、彼は、「呪うべき句を三つ四つ」と説明している。

蝉しぐれ死に場所を探してゐるのか
青草に寝ころぶや死を感じつつ
しずけさは死ぬるばかりの水が流れて
けふのみちにたんぽぽ咲いた
朝は涼しい草鞋ふみしめて
あの雨がおとした雨にぬれている
岩かげまさしく水が湧いている
ここで泊らうつくつくぼうし
炎天の下を何処へゆく
雲かげふかい水底の顔をのぞく

などである。

人吉では宮川屋に投宿。宮川屋を「35銭、上」とした。

「焼き捨てて日記のこれだけか」

9月16日に人吉で日記を焼いたのではない。八代に向かう前に焼いている。10日以上前の行為を句にしたのである。焼いたときの心情と発句のときの心情とは同一だろうか。おそらくはちがうであろう。それにしても、なぜ山頭火は日記を焼いたのであろうか。焼いただけでなく、その直後に、再び、なぜ、日記をかきはじめたのか。焼く前の日記と焼いたあとで書いた日記は同一のものであるのか。この問題は山頭火を考えるとき大きな論点だが、ここでは立ち入らない。ただし、新しい日記については山頭火は公開されることを予定していたことに留意する必要があるだろう。公開を予定した日記と公開を予定しない日記では性格がちがう。公開を予定した日記には、どこかに、「嘘」がある。

人吉駅前の山頭火の句碑
（人吉・球磨　山頭火の会の建立）

宮川屋には9月14日から9月16日までの3日の間泊まった。気力を取り戻したのか、宮川屋での日記は詳細で多くの句も残した。それまでに渦巻いた感情が一挙に文章として凝縮されたかのようにみえる。歩くなかで文章を整理できたのかもしれない。

人吉についての注目すべき記述を少しばかり紹介する。

◎9月15日

「同宿の支那人のやかましさはどうだ。もっと小さい声でチィくパアくやればよいのに。鮮人はだらしないこと日本人同様。つけあがること日本人以上。支那人は金貯めの人種だ。行商人の中で酒でものんでいる支那人をみたことがない。」

◎9月16日

「人吉で多いのは、宿屋、料理屋、飲食店、至るところ売春婦らしい女を見出す。どれもオペシャンだ、でもそういふ彼女らが普通の人々より報謝してくれる。私は白粉焼けのした寝乱れた彼女らからありがたく一銭銀貨をいただきつつ、彼女らの幸福を祈らずにはゐられなかった――不幸な君たち、早く好きな男と一緒になって生の楽しみを味わいたまへ！」

現在の人吉郵便局。かつての郵便局も現在地の近くにあり、山頭火はその郵便局で留置の手紙を受け取った

◎同16日

「田舎まわりの仲買人から百姓衆の窮状を聞かされた。この旧盆を迎へかねた家が多いそうな。この辺の山家では椎茸は安いし、まゆは安いし、どうにもやり切れないさうな。桑畑をつぶしてしまひたいけど、役場からの慰撫によって、やっと見合わせているそうな」。この窮状は日雇労働者の場合はもっとひどく、「これでは死なないだけだ。いきてゐる楽しみがない」

同じ日に「二三句出来た。多分今までのそれらとは異色があるやうに思ふ」として、次の句を日記に記している。

かなかなないているひとりである
一すぢの水をひき二つの家の秋
焼き捨てて日記の灰のこれだけか

現在の人吉駅

6. 宮崎県へ

9月17日、8時の汽車で山頭火は吉松に向かった。

種田山頭火

明治15年（1892年）12月3日、山口県佐波郡佐波今村（現在、防府市）で生まれる。名は正一。昭和15年（1940年）10月11日、愛媛県松山御幸寺内一草庵で死亡。享年59歳。

（春秋）

「宮川屋」は山田川河口近くにあった（右岸）。写真の橋の手前付近である

「球磨川の駅・ものがたり」を終えて

熊本産業遺産研究会　松本晋一

このシリーズは「週刊ひとよし」が「月刊くまがわ春秋」に移行する2年半前の2016年（平成28）1月、雑誌名にちなみ人吉中央出版社の編集部から「各駅を球磨川に沿って河口から上流までを書いて欲しい」との依頼で書き始めたものです。その時、肥薩線川線とくま川鉄道の各駅を記すことは、駅も沢山あることだし、それは〝球磨川を書く〟ことにもなり、恐らく2年位は書けるなと思ったこと。そして地元の鉄道愛好家の福井弘氏や小沢年満氏（故人）の資料など、控えには強い味方も居るので、何とか書けるなと感じて、このシリーズの執筆をすぐにその場で即答したことを思い出します。

これまでの2年半、先ずは遠い八代方面からの取材に始まり、各駅に毎回3～4回の取材をした訳ですが、取材地で一番遠かった八代駅から、ようやく白石駅付近より、段々取材にも馴れて来て、列車の停車時間と撮影の待ち時間のタイミングが合い始めました。それはやはり、ベテランの先達・福井弘氏の同道のお蔭でした。そのうち、一人で取材に行くようになっても、列車ダイヤとタイミング良く、上手に写真取材（中味は別として）が出来るようになっていったのです。

そしてついに、2016年4月創刊号の扉に、連載企画「球磨川の駅・ものがたり」として宣伝が打たれ、もう間違いなく逃げ出すわけにはいかなくなったのでした。

一応、連載の回数では29回ですが、掲載した駅数は肥薩線川線が新旧の八代駅を入れて16駅、くま川鉄道の14駅、バス路線が1駅で、合計31の駅を訪れました。その中で駅務員の居る駅は川線では八代、坂本、一勝地、人吉の4駅。湯前線では人吉温泉、相良藩願成寺、あさぎり、湯前の4駅、バスの村所駅の計9駅で、他は前から無人駅となっています。

この取材の間にも、様変わりしつつある駅は八代駅とおかどめ幸福駅の2駅で、駅舎と関連施設がリニューアルされようとしており、後者には今週、〝幸せの黄色いポスト〟が据えられました。

川村駅での大歓迎振り（2017. 7月）

○球磨川の駅の見どころ

改めて取材してみますと現存する30駅の夫々に個性や特徴が見られます。

例えば「瀬戸石駅」では、度重なる水害による駅舎の風化と寂しさ。すでに球磨川最後の渡し舟船頭、球磨川八郎さんも居られず、一層の人気（ひとけ）のなさを覚えました。それは海路駅も同様です。駅の後方にそびえ立ち、昔は子どもたちで賑やかだった海路小学校跡の寂寥感の大きさと、対岸の国道を走る自動車数とは対照的に、学校と駅周辺のもの静かな佇まいは、なんとも言えないものでした。そんな駅を訪れる時、ホームとその駅周辺など、そこに〝人の居る温もり〟が大事だと感じました。

球磨川の岸に群れゐて遊べるは
ここの狭間に生まれし子等ぞ

（斉藤茂吉）

静かな佇まいでも、まだまだ生きて元気だと思わせてくれる駅、球磨川の歴史を感じさせてくれる駅は「白石駅」です。川下りの旧着船場だったこの駅から東西に見える川の様子、すぐ下流の神瀬、川内川との合流・住吉神社付近、駅正面の岩戸鍾乳洞には、川と舟の守り神としての役割、昔の船頭宿としての存在意義を大きく感じます。この駅自身

にも鉄道路線と川の守り神の雰囲気が備わっています。普段は淋しいくま川鉄道の「川村駅」もそうなのですが、週末土日のはぴねすトレイン時の賑わいは半端ではありません。

これらの球磨川沿線・各駅に共通して言えることは、付近の一般住民の皆様方の手による鉄道への業務支援、観光支援が行き届いていることです。

有り難かったのは、何と言ってもこの連載を受け持ったことで、何かしら仕事と生活への〝張り〟が出来たことです。連載数を増すごとに、関係の読者の方々から「あれば、読んどっですよ」「よう、調べなったですなあ」「○○駅の話は面白かったです」等の感想を戴くと、「あー、読んで頂いているのだ」「もう少し取材が足りなかった」「写真が小さかった」等々、一方では毎月の掲載が終わる度に各回への悔やみも残る連続でした。それでも編集担当の松本学氏には〆切やレイアウト他、相当なご無理をお願いして読みやすい紙面に仕上げて頂いたのでした。

河口から上流までの総延長は115㎞。その球磨川沿線に点在する各駅の価値、駅の大切さ、有難さは、そこへ行きさえすれば百年前の風情、季節ごとの素晴らしい舞台、そして気持ちの癒しです。それらが四季の変化に富んだこの〝球磨川の駅・ものがたり〟なのです。最初の取材から2年半が過ぎ、「あの駅は今頃どうなっているかなあ」と、今日も気になる駅たちです。ご愛読、有難うございました。

（人吉市九日町　平成30年8月30日）

夏の市房山と球磨川（東多良木駅近く）

連載「球磨川の駅・ものがたり」を読んで

福井　弘（ひろむ）

本誌創刊号２０１６年（平成28）４月号から掲載された「球磨川の駅・ものがたり」は、その名の通り、肥薩線八代駅から球磨川沿いにＪＲ九州及びくま川鉄道の各駅と、更に県境を越えた宮崎県の村所駅までで終稿（２０１８年８月号第29号）。この間、実に２年有余の長丁場の連載であった。

この方面の記事は鉄道愛好者の分野では、当然のことながら鉄道そのものにウエイトが掛かる。筆者は鉄道愛好者ではなく、最初は少し冒険かとも思われたが、産業考古学会や熊本の産業遺産研究会に所属される、その方面の研究者としてのオーソリティーで、事実文中に見える豊富な資料や文献を駆使され、鉄道愛好者に対しても何ら遜色のない記述内容である。

鉄道愛好者でないのが幸いしてか、と言えば言い過ぎかもしれないが、鉄道よりも〝人文〟に関する記述が多いのは当然の結果であろう。つまり〝駅を中心とした風土記〟としての貴重な記事である。

今回の取材で、道端の歩行者は勿論、地元の人たちにもアポなしで、仕事中の人、商店街の人々にも声を掛けられ、その土地ならではの話や、産業遺産のみならず神社仏閣を始め、歴史遺産的な建造物をも探訪され、これらを積極的に写真撮影され、それらは貴重な映像として誌上を飾った。

本来なら各号毎の感想を述べるべきであるが、浅学な私にとっては大変ハードルが高い。内容は大局的に見ると鉄道愛好者もさる事ながら、一般読者向きで、特に中学生以上の副教材の郷土資料として採用されるなら幸甚である。

（人吉市、鉄道愛好家）

記事校正中の福井氏（左）と

肱川の水害から、球磨川の昔の暮らしとダム問題を考える②

自然観察指導員熊本県連絡会会長　つる詳子

前回は、西日本豪雨における肱川の二つのダムの緊急放流の問題点と、昭和40年水害当時の旧八代市や坂本町の様子を紹介させていただきました。今回は水害から一ケ月経った肱川の訪問から見えてきた肱川流域の治水の問題点と、昭和40年水害時の芦北町を紹介したいと思います。

肱川（ひじかわ）の水害被災地訪問から考える

今回の西日本豪雨で、大きな被害を出した愛媛県肱川の現場を視察してきた。結論から言うと、今回の水害をもたらした原因は、①治水効果が望めない二つのダム（野村ダムと鹿野川ダム）を造ったこと、②ダムの操作がまずかったこと、③緊急放流の住民への通知が遅れたこと、④ダムがあるから安心と住民に思わせ、遊水地だったところを住宅地や商業地にしたこと、⑤ダム第一主義で、他の治水対策が大きく遅れたこと等々、ダムに起因する人災であるとはっきり言えるほどの現場であった。また、数十メートルの高さの洪水吐から落とされる放流水は流入水とは比べようもない程のスピードと高さをもって、津波のように駆け下った。「水位が上がるのもあっという間だったが、引くのも早かった」と、球磨川において過去市房ダム放流により水害に遭った方たちから聞く話と全く同じ話を住民から聞く。そのあっという間を具体的に聞くと、「10～20分の間に3メートル上昇した」とのこと。

野村ダムの下流2㎞程のところにある天神橋から下流の橋8つはみんな越流していた。そのうち一つは流された。橋は周囲の堤防や道路より高くなっているのが普通である。つまり、肱川の場合は堤防が決壊したのではなく、急激な水位の上昇で、堤防の至るところを越流し氾濫を招いたという感じである。

野村地区の川沿いにある三島神社の宮司さんからお話を聞いた。昔は、周りは田んぼばかりで、洪水の折には神社が真っ先に浸かったとのこと。普通は津波が来ても被害を受けないよう高台に作られることが多い神社だが、三島神社と名がつく神社には、水難鎮護の祈願を込めて洪水の多いところに建てられるものが多くが、ここもその一つかもしれない。

７３３年建立されたこの神社も１５９６年大氾濫で崩壊・流出、１７２９年にも本殿が流出するなど被害に遭ってきた。老朽化で昭和50年に建て替えられるまでは、本殿含め床板は洪水対策として外せるようになっていたが、ダムの治水効果を信じて同様の対策は講じなかったという。鳥居の貫石の下まで来たという今回の水で、すべての石灯篭は倒され、手水舎の屋根は２００ｍ下流まで流された。野村ダムの建設後、遊水地だったところに増えた建物が今回、すべて被害にあった感じだ。下流の大洲市も同様、鹿野川ダム建設後田んぼだったところに住宅街や大規模商業施設が建てられ、今回大き

肱川の鹿野川ダム。異常時洪水時防災操作により、通常の６倍の水を放流して、下流に大きな被害を出した

野村町の中心部。ダム放流後5～15分の間に、一つの橋を除いてすべての橋や堤防を越えて、野村町を襲った

大きく捲れた肱川沿いの道路。この道路は発泡スチロールを利用したEPS工法によって盛土されていた

肱川と支流河辺川合流点で河辺川沿いが肱川集落である。堤防が低いため、逆流によって多くの家屋が２階まで水が来た

な被害を受けた。

また、ダム神話が生きているこの流域の河川整備はとても遅れている。特に支流との合流点は、支流の堤防も宅地も本流よりずっと低く、溢れるのが当然のところが目立った。球磨川の水害で支流との合流点に水害が多かったのと同じである。

昭和57年に球磨川の水害に見舞われた坂本地区を見た時に、水害の怖さを知ったが、それがダムの放流に起因するものであることを後で知った。国交省や土木課の担当者は、こんな現場をどれ程見てきたことだろうか。ダムの放流が下流にもたらす水害の甚大さは想定内のことであるにも関わらず、肱川では過去の教訓が何も生かされてないこと、また、ダムがあるから安心と思っていたという住民の声の多さに驚いた。ダムの緊急放流はダムがない時とは比較もできない程に甚大な水害を起こす可能性は全く知らせずに、どんな雨が降ってもダムが生命財産を守るかごとくに、下流住民に信じさせてきたこと、そのことに言いようのない憤りを感じた。

昔の球磨川と昭和40年水害（芦北町）

写真⑤は瀬戸石ダムの上流1㎞程の海路にあった家である。川幅は今の3分の1ぐらいしかない。瀬戸石ダムが出来るというので移転を強いられたのだが、こんなに古くなるまで、毎年の洪水に流されることなく建っている。球磨川は決して暴れ川でなかったという言葉に頷ける。ここの住人は、毎日窓から釣り糸を垂れていたのかもしれないと想像しながら、球磨川の恩恵を余すところなく受けていたという流域の過去の暮らしを思った。

その海路に知人の家があった。県道の道路沿いに数軒が並んで建っていた。瀬戸石ダム建設当時は、ダムが水害の原因になるとは誰も思わず、道路沿いは移転の対象になっていない。しかし、年々水面が上昇してくるという実感があった。建設当時より水面が3ｍは上昇したという実感があったので、電源開発に問うたら、「それは絶対ありません。増水しても水はダム湖堤防の上端（道路の縁）にまでしか来ません」と説明。彼の家はその道路から僅か5㎝高い敷地の上である。納得しないまま引き下がったが、昭和57年にあっという間に水が来て家を失い、八代に移転した。今はその時より、どれほど水面が上がっているのだろうか。家があった場所は、現在更に2ｍ程嵩上げされ、道路冠水した時の車の避難場所になっている。

写真⑤：瀬戸石ダムから1㎞程上流の海路迫にあった家。球磨川の川幅は今よりかなり狭いが、流されることなくこの家で暮らせてきたことが分かる

写真⑥：芦北町漆口集落。ダムが出来る前は、矢印の堤防の高さに家があったが、水害に遭うことなく、代々この場所で生活してきた

本流と支流との合流点での水害の起こり方には、どこも共通点が多い。ダムができると、本流の堤防や道路が高くなるが、支流そのものの嵩上げは無理なので、支流沿いの堤防や宅地の嵩上げは後回しにされる。というより嵩上げにも限界がある。結果、本流の水位が高くなると、支流の方に逆流するという結果になり、本流の方が越堤しない場合でも、支流の方から溢れてくる。ダムを造る時から予想出来ているハズである。こんな事例が発生した場合には、その後のダム建設や堤防建設では配慮されるべきことであるが、同じことを今も繰り返している。

このような水害の起こり方を、球磨川で一番繰り返してきたのが、芦北町漆口集落（写真⑥）である。友人のOさんの実家もここにある。球磨川との合流点まで山が迫っている漆口集落の支流漆

口川沿いに、山肌に張り付くように家々が建っている。Oさんの家も、今の道路より5m程は低かった昔の漆口川沿いの道路沿いにあった。絶対水害も山崩れもない場所であったので、家が建てられてきた。水が来ても床下浸水程度であった。それが、下流に瀬戸石ダム、上流に市房ダムが出来て状況が変わった。瀬戸石ダムの建設とともに道路も家屋も嵩上げされているが、大雨時に瀬戸石ダムの水位が上がり、そこに市房ダムが放流すると、狭い球磨村付近で流れが滞り水位があっという間に上昇し、水害が起こるようになった。Oさんの家の2階への階段の途中の柱に水害時の水位の記録がある（写真⑦）。記録の半分ほどを右に書き出してみたが、2～3年に一度は2階までくる水害に遭っている。平成10年後は流木による水害が被害を一層酷いものにしている（写真⑧）。平成18年の水害を機に、やっと3度目の嵩上げ工事が始まり、現在更に高いところに建て直された。

写真⑦：球磨川から3軒目の階段途中にある、水害の記録。ダム建設後は毎年のように水害に遭う水害常襲地になった

肱川の例も含め、本流と支流の合流点の水害を見聞きする度に、合流点の水害は人災であることを再認識する。

（続く）

【鶴・しょうこ／八代市】

写真⑧：平成10年以降は流木が増え、被害を大きくした（平成18年時水害時）

七夕綱（たなばたづな）

芦北町・大字大岩字岩屋川（いわやかわ）内地区

岩屋川内地区の伝統的な飾り。木々子などでみられる飾りと同一である

本誌第6号14頁の亀田英雄「木々子の七夕綱」は、熊本地震直後の八代市坂本町木々子地区の七夕綱を紹介したもので、綱の飾りに地震の影響を感じ取れる論考である。次に、本誌18号4頁以下の坂本桃子「それぞれの想い、それぞれの七夕綱」は、①八代市坂本町木々子地区と並んで、芦北町祝坂地区、下白木地区の七夕綱を比較分析するとともに、②七夕綱の由来について概括的説明を

岩本さん（左）と福山さん。突然、お邪魔したにもかかわらず、貴重な時間を割いて、いろいろとご教示していただいた

七夕綱を見上げる福山さん。七夕綱作成の苦労や意図などを身振りで教えていただいた。岩本さんによれば、福山さんは6月末頃から七夕綱の作成作業を開始されるようである

加え、③国の制度としての「無形文化財指定」を住民の視点で捉え直した力作である。

今回は、芦北町大字大岩字岩屋川内地区の七夕綱を紹介する。同地区の人によれば、以前は、8月6日の午後、若者たちが「青年小屋」に集まり藁で縄をつくり簡単な飾りをつけて、小屋の横の川（岩屋川内川）に七夕綱をかけ、作業終了後に、青年たちは同小屋で宴会をしていた。その後、青年たちの七夕綱作りは衰退し、婦人会の女性たちが飾りをつくるようになった。しかし、高齢化の波のなかで、婦人会の活動も弱まり、現在では、同地区の区長・岩本康正さんが地区全体の取りまとめをおこないつつ、一人の男性に七夕縄作成の作業を一任している。その男性は福山英樹さん（67歳）。福山さんが当日までの準備を一手に引受けるが、縄を張る作業は地区総出でおこなう。縄を張る前には、川ざらいもおこなう。岩本さんの説明によると、七夕綱作りの技術が卓越していること、高齢化のなかで地区全体の共同作業が難しくなっていることから、綱や飾りの作成を福山さんにお願いする形になっているとのことであった。

牛で田を耕している風景の飾りなど

彦星と織姫の逢瀬。いくぶんエロチックである。福山さんの独創によるものではなく、地区住民からの要望に応えて、写真のような飾りにしたとのことであった。男女の逢瀬について率直な表現であると感じた

福山さんは聴覚障害者で、耳が聞こえず、話すことができない。手話の訓練をうけていらっしゃらない。そのため福山さんと直接にコミュニケーションをとるのは容易ではないが、地区のみなさん、特に区長の岩本さんは文字通りの身振り手振りで英樹さんと十分に意志疎通できるように感じた。地区のみなさんが福山さんの技量と努力を称賛なさっていたことが記憶に残った。

福山さんは、婦人会のみなさん（その一人は福山さんのお母さんであった）の作業を手伝いながら七夕綱づくりの技術を身につけられたようである。伝統的な七夕綱の飾りに加えて、独創的な飾りが多数あって、そこに岩屋川内地区の七夕綱の特徴がある。縄は強く、飾りも丈夫であった。

七夕綱の由来についての伝承は同地区には残っていないようであるが、青年の作業として理解されてきたことには留意したい。八代市坂本町瀬戸石地区の七夕綱も青年の仕事であったとされる。同地区の七夕綱は球磨川本流にかけるもので力仕事であった。

以前は8月6日に綱を張っていたが、現在では、8月の第一日曜日に綱を張っている。区長の岩本さんは、仕事で八代市坂本町木々子地区に出向かれたことがあって、そのとき木々子にも七夕綱があるのだと驚かれたという。

大岩という地名は球磨川を挟んで対岸（球磨村）にもある。そういう例は球磨川流域には多いので、球磨村の大岩地区との関係をお伺いしたところ、球磨村の大岩地区とつながりはないとのお返事であった。

（春秋）

馬にまたがる彦星と織姫。これも地区住民の要望によるものである。馬は農耕馬を指すとともに、なにごとも上手く（ウマく）いくようにの意味を重ねたものだが、それを彦星と織姫の逢瀬の姿に作り上げている点に特徴がある

同地区の公民館。七夕綱は公民館の近くに飾られている。公民館は青年小屋の跡地に建てられた

くまがわの神さん仏さん㉕

青井さん前の金比羅さん

宮原信晃

我が家は国宝青井阿蘇神社（通称青井さん）の真ん前の道を入った場所にある。その道を進むと「金比羅宮」があり球磨川に着く。

青井神社側より金比羅さんを望む

今は、下青井町と上青井町との境界線の道ではあるが何の何の。

この道こそ相良のお殿様が参勤交代のために通った道であり、「祓川（はらいがわ）の道」と記録にもある。

寛文8年（1668年）球磨川祓川の瀬から、初めて参勤交代の船がお祓いを受け出航する、と青井さんの本にも紹介してあるのだ。

そのお祓いを受けた場所が今回御紹介する金比羅宮であり、眼下には祓川の瀬がある。私達が小さい頃は人吉橋の下の瀬を「大波」と呼んでいた。そこが、祓川の瀬なのであった。

先ず青井さんに参拝し、禊橋（みそぎばし）を渡って真ん前の南へ向かう道に入る。30mで右に私の宮原はり灸院の前からもう30mで金比羅宮へ着く。3段の石段を登って拝殿で手を合わせれば「あー！」と気づくのである。

「青井さんを拝んでいる」と。

金比羅さんより青井さんを望む

金比羅宮を拝むことは、それこそ、まっぽし、青井さんを拝んでいるのだ。

天保3年（1832年）の球磨鳥居も触って頂きたい。人吉球磨特有の何ともいえぬ小さくてもどっしりとして、しかも気品があるのだ。

この金比羅宮は江戸時代からあったような貫禄があるが、実は昭和38年に元の国民宿舎からこの地に移されている。お殿様の別荘に元はあった訳だ。

お殿様の参勤交代や、球磨川の船の登り下りの安全。それに、金比羅様は四国の神様だからお殿様が瀬戸内海を航海する時の安全祈願にうってつけ。

金刀比羅宮（ことひらぐう）

◆御祭神　大物主大神（おおものぬしのおおかみ）
＊別名　大国主命（おおくにぬしのみこと）
崇徳天皇（すどくてんのう）

◆大祭日　五月下旬
◆月次祭　毎月十日

「こんぴらさん」の愛称で親しまれている金刀比羅宮の御本社は、香川県仲多度郡琴平町の象頭山の山腹に鎮座します。

御祭神の大物主大神が古事記に「海（うなばら）を光（てら）して依り来る神」とあることから、古くより海の民の崇敬と信仰を集めて来たのでした。

この御分霊をまつる当社の御鎮座年代は定かではなく、当初相良家下屋敷（現在の国民宿舎くまがわ荘）に勧請され手厚くまつられていたのですが、諸般の事情により昭和三十八年にこの地に遷されたのです。

相良家が江戸時代の参勤交代で船を使用していた関係で、海上安全の神と信仰していたのでしょう。

現在では、球磨川の平穏とくま川下りの安全運行また日頃の水の恩恵に対する感謝の真心が捧げられ、人吉の観光に携わる人々に広く崇敬されています。

またこの鎮座地は、元々青井阿蘇神社例大祭神幸式お旅所の御神座として造成された由緒ある場所です。

金比羅さんにある江戸時代の石鳥居

そういえばこんな話も残っている。「寛永18年（1641年）47代大宮司惟延、7月28日に相良21代頼寛が江戸より帰郷の際、豊前の平戸沖で台風に遭い危機的状態にあることを憂い、海運の霊験ある当時現在の七日町に鎮座していた諏訪社に一命にかえて無事を祈った。願いが通じ、頼寛の乗った船は8月5日に無事佐敷の港に着岸し、8日に帰郷するが、その後大宮司惟延は病にかかり殉死したという」とある。

昔も、今も、海運の無事を祈り願う心は同じである。

今では、毎月10日、青井さんの神主さんが参拝され、それこそ、春の頃には球磨川下りの船頭さんや観光関係者がぞろぞろとこの道を通って金比羅宮へ向かわれ、一堂に集まり青井さんの笛の音を聞きながらのお祓いがある。

できれば、私の大漁祈願もお願いします。

【みやはら・のぶあき／FBお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】

柳人があじわう漱石俳句

―㉚―

いわさき楊子

―夏目金之助先生　五高を詠む―

漱石は熊本高等学校秋季雑咏として、五高を記録するかのような句を残している。学校、運動場、図書館、習学寮、瑞邦館、倫理講話、教室、植物園、物理室、化学…と前書きをつけて一、二句ずつ詠んでいる。その中から四句を紹介する。

いかめしき門を這入れば蕎麦の花

（漱石32歳）

この門とは今もある第五高等学校の赤い煉瓦の門のこと。その門と赤煉瓦校舎（いまは五高記念館となっている）の間には、現在は学食や図書館などの施設がある。そのころは蕎麦畑だったとは…。立田山の緑を背景にして、煉瓦の赤と蕎麦の花の白のコントラストが目に浮かぶ。

秋はふみ吾に天下の志

（漱石32歳）

若い夏目金之助先生の勉学への素直な志を読みとることができる。下の写真は熊大黒髪敷地内の五高記念館の東にある銅像。このわきにこの句の碑がある。

暗室や心得たりときりぎりす

（漱石32歳）

化学とは花火を造る術ならん

（漱石32歳）

漱石が五高で教師をしていたときの学生に、後に物理学者となった寺田寅彦がいた。親しく交友し、漱石を主宰として仲間と紫溟吟社という俳句結社を作り、人文の分野でも活動した。のちの小説『吾輩は猫である』の水島や『三四郎』の野々宮のモデルは寺田寅彦である。漱石を生涯師と仰いだ。

赤いもの見たあとすする狸蕎麦

数学が終わると佃煮のにおい

【いわさき楊子／川柳と俳句の愛好家、熊本市在住】

建築みてある記 ㉕

鶴之湯旅館をあるく

森山　学

写真① 鶴之湯旅館

八代市坂本町葉木の「球磨川温泉鶴之湯旅館」（写真①）。最寄り駅はＪＲ肥薩線の葉木駅だ。かつて宿泊客は、旅館の遊覧船に乗って、県営荒瀬ダムのダム湖上を駅から旅館へと送迎してもらえたらしい。

旅館の創業は昭和二九年（一九五四）。荒瀬ダム竣工の年である。観光地としてにぎわった荒瀬ダムとともにその産声をあげ、観光客の受け皿となった。しばらく休館していたが、二年前に営業を再開し、その一方でこの三月に荒瀬ダムの撤去工事が完工した。

そもそも創業前は、いまの葉木橋のたもとの球磨川右岸、葉木の渡し場の遺構が残る地に、「土山茂商店」という屋号で魚介販売や宿泊業を営んでいた。この土地が荒瀬ダムの建設により水没したため、現在地へ移転せざるを得なかったわけである。ダム湖がなくなったいまは、当時のコンクリート基礎（写真②）が現地に露わになっている。

写真② 葉木の渡しの遺構付近にあるコンクリート基礎

まさに鶴之湯旅館は、荒瀬ダムの建設と日本初のダム撤去といった歴史的変遷の一時代を象徴する建築物と言える。

さて、それでは訪問しよう。鶴之湯旅館は桜が立ち並ぶ護岸と肥薩線の線路にはさまれて、球磨川に沿うように建つ。線路は、旅館の隣で葉木トンネルへと吸い込まれる。トンネルは肥薩線開通時（明治四一年＝一九〇八年）のもので、坑口の壁面は要石に石材を用いるほかは、レンガ造である。

写真③ 遊覧船の船着き場の階段

護岸には、かつての遊覧船の船着き場の階段（写真③）や、はしごが残る。江戸時代にはすでに湧出していた温泉水が川面に流れ落ちる様子も見ることができる。その川面には「湯の瀬」が復活し、「夫婦岩」が現れている。季節には鮎釣りの舟が結ばれる。球磨川の流れとダム湖の記憶が重畳する痕跡が風景をなす。

その建物は木造三階建てである。木造三階建ての建設可能だった時代は限られる。木造三階建て住居の禁止令が廃止されたのは慶応三年（一八六七）で、これ以降にその建設が可能となったわけである。戦時中、昭和十四年（一九三九）に木造建築統制規制（商工省令六七号）が布かれ、建設が難しい時期もあったが、実質、その建設が認められなくなるのは、昭和三五年（一九六〇）の建築基準法改正のときである。この約九〇年間にのみ、建設が認められた構法なのである。

つまり鶴之湯旅館は、木造三階建ての構法の最晩年に建設されたものと言える。

ちなみに「土山茂商店」時代も、建物は木造三階建てだったとか。

建物の長手にあたる川側、かつてのダム湖側の、その全長にわたり、また三階全ての階にわたって木製窓枠のガラスの掃き出し窓が立てられ

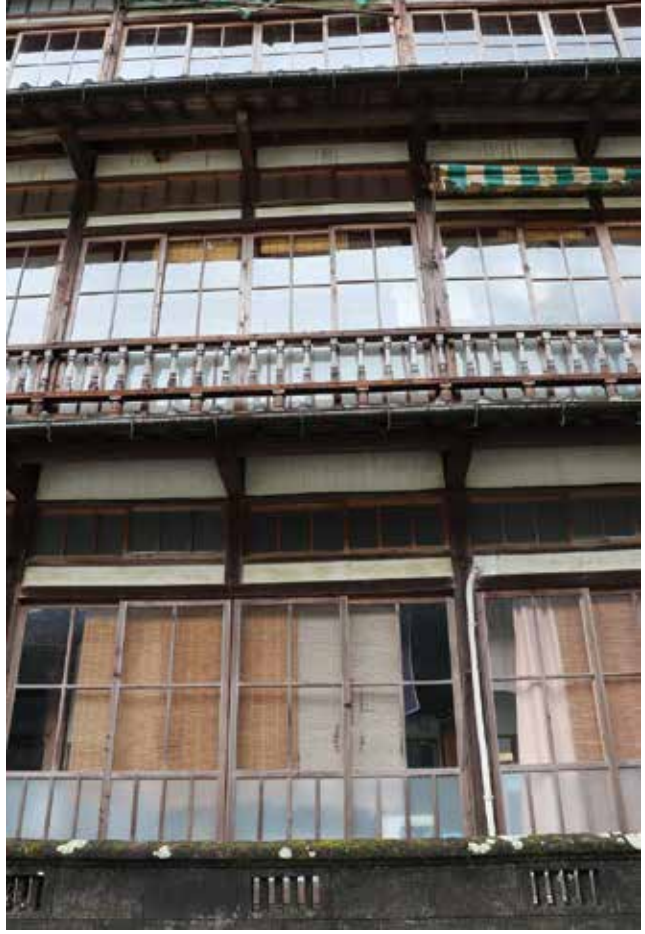
ている。その外側に勾欄がつく。一階と二階には出桁が庇を受ける出庇がつく。出庇の下に取り付けられた緑色の庇テントは、葉木地区の民家によく見られるものだが、実はこれ、ある頃、この地区を訪問した業者から購入したものらしい。何と言っても、鶴之湯旅館でもっとも印象的なのは、この開放的な外観（写真④）である。この外観に、緑色の庇テントや、時折勾欄に干してある布団といった素朴な生活景もまたいい。

このガラス窓の内側には縁廊下（写真⑤）。この縁廊下から、または障子を開け放した座敷から縁廊下越しに、贅沢にも瀬の流れや夫婦岩を眺める。かつては合宿中のボート部の練習をダム湖面に眺めることができた。

一方、建物正面は、旅館という非日常空間への入口として重厚なデザインである。入母屋屋根の妻、一階、二階の千鳥破風が三層に折り重なる。二階壁面には猪目（いのめ）の文様をした下地窓（写真⑥）。猪目はイノシシの目のかたちをして厄除け・火除けの意味を持つものだが、ハートをひっくり返したかたちだから、かわいらしさもある。この閾（いき）を一歩、踏み入ると非日常空間が広がる、そんな期待を抱かせる。

旅館名が書かれたガラス戸を開けると、西洋の柱頭か日本の肘木にヒントを得たデザインの丸柱、その脇から上る大階段、奥へ続く中廊下、振り子時計が目につく。玄関もじっくり見てみれば、うろがぽっかりと口を開く床柱の床の間、矢筈張り（弓の弦に引っ掛ける矢の羽のように、V字型に板を張る）の猿頬天井（天井板を受ける竿縁の角が大きく面取りされて、猿の顔に似た六角形断面となっている）、なつかしい印象の壁面収納の下駄箱（写真⑦）。お客さんをお迎えする気持ちがそのままデザインに満ちている。

中廊下の右手、川側の座敷は、一階の一番奥に、床の間と仏壇がある「仏の間」。二階は鶴の背景が描かれた舞台のある「広間」。三階には床の間を備えた客室群がある。その欄間は、各々、蝙蝠（こうもり）形の格狭（ごうざ）間透


写真④ 川側の外観（窓の上のひさしが出庇。手すりのようなものが勾欄）

写真⑤ 縁廊下から球磨川を見る

写真⑥ 二階の千鳥破風の下にある猪目の下地窓

写真⑦ 下駄箱

写真⑧ 二階の広間。縁廊下側に格狭間透かしの欄間

かし（写真⑧）となっている。「福」につながる蝙蝠は縁起ものである。

一方、二階の中廊下の左手にある客室は、ガラス窓をはさんで目の前に葉木トンネルがある。SL人吉号がトンネルに入っていく姿と音を間近に体感できるとっておきの場所である。

全体としては決して饒舌な数寄屋風ではない。地元・坂本町の木材を建材に使用しており、節度をもった素朴な意匠と言える。

玄関前の地蔵、鶴のオブジェ、塀の温泉マーク（写真⑨）もノスタルジックです。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

写真⑨ 塀の温泉マーク

新・日曜釣り師心得⑧

大ボラ釣り師ここにあり

宮原赤竿

自慢ではないが、私はとびっきりヘタな釣り師である。

この灼熱の太陽の下でも海のイカダの上で釣りする。太陽の殺人光線を浴びせられ、下の海面からはギラギラの反射鏡の攻撃にも耐えながらも、必死の形相で耐える。でもやっぱりなかなか本命魚は釣れないのだ。

「今日は日曜日だからお魚さんもお休みばいね」と同じくヘタの相棒と相づちをうち慰め合う始末。

場所は人吉からも近い津奈木町の合串港の湾内にあるイカダでのダゴチン釣り（エサをダンゴにくるんでえさ取りの猛襲を避けて海底へ落とす釣り）。早朝6時から午後の3時までの暑さとの戦いの釣り。一日中お魚さんとの知恵比べが続く。

チヌの手の平級から足の裏サイズを数枚釣って、最後は大ボラの釣果で終わった。

本命チヌは釣れなかった。

これからも懲りない釣りの旅は続くのであった。

【みやはら・せっかん／熊本飛翔会会長、人吉市】

夏のパラソルと村口臥竿

新聞紙より大きい大ボラ

とったど〜!

上杉芳野の「あがっ段」㉗

決断、実行と危ない旅へ

私には、遠く離れた水俣に人以上の姉妹の様な人がいる。私達は二人とも自衛隊関係の役員をしていて何年か前に研修旅行に行った時、バスの中でみんなを楽しませようと、私の得意なバスガールや歌やゲームを企画し進めていった。彼女にとって初めての体験だったようでとても喜んでくれた。

「こんなに楽しかったのは初めて」と私の手を取って飛び上がって喜んでくれた。

それからは、以前私が勤めていた社協のイベントやチャリティーショーにも見に来てくれ、我が家にも遊びに来てくれた。

嬉しい時も苦しい時も電話をかけて来てくれ話してくれた。私のことを信じきっての行動と一生懸命さに私も姉のように慕うようになっていた。

「こんな人が親友というのだろう」と思った。

そんな彼女が突然電話してきた。

「芳野ちゃん私、熱中症で、4日間入院してたんよ。まだ頭がフラフラして自分じゃないみたい。芳野ちゃんの元気な声を聞いたら元気になれると思って…」。

彼女のいつもにない落ち込んだ声にびっくりした。

何かしてやらんばん！

何ばしてやろうかと考えて浮かんだのが食事のことだった。毎日の料理を作る元気もないはずだし、おかずを作って宅急便で送り食べてもらって元気になってもらおうと考えた。

我が家にある材料で何種類もおかずを作った。93歳のおじいちゃんも食べられる様な田舎料理だ。

いざ、クール宅急便で送ろうと思ったが「元気付けるには直接届けるのが一番」と思い急遽、水俣に行く事にした。

昔、我が家の謙ちゃんが運転してくれて「田野のトンネルを通ってあと20分ばかりで着く」と思ってあさぎり町を出発した。

人吉から大塚、そして田野の前田一洋先生宅の家の下のトンネルを通ったまでは良かったが、行けども行けども人気のない山ばかり。やっと家が見えて来て大口の町を通り過ぎ、また山を上り下りと入り込んでいく。

ここで事故したり何かあったら誰も助けに来てくれないと思うとだんだんと恐くなり運転しながら涙が出て来た。ハンドルをしっかり力を入れて持って、ただひたすら走った。

1時間30分かかってやっと着いた。我が家の主人の謙ちゃんに電話した。

「あんた、本当に水俣に行ったんね。よお～行ったね。帰りはいつものごと、居眠りせんごと用心して帰ってきないよ」と謙ちゃんが言った。

彼女の家に着いたとき、これまでこんな遠い所から来てくれていたんだと改めて感謝。私が慌てて作ったごちそうともいえないおかずを喜んで食べてくれた。「もう大丈夫よ、元気になったよ」と彼女は笑ってくれた。

帰り道は何とかヒヤヒヤしながらも帰宅することが出来た。

私の危ない旅は、楽しい旅へと変わっていた。

【うえすぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

元気になって喜んでくれた水俣の松本ひろ子さんと93歳のおじいちゃん

帰る前に「元気でね」と、おじいちゃんとハグ

エンブリー・ノート③
三十三観音巡り

ジョン・エンブリーは著書『須恵村』において、2箇所で「三十三観音巡り」に言及している。長い引用になるが、エンブリーの認識として該当箇所を紹介しよう。

①「秋の彼岸の一週間は、球磨の三十三観音堂で、巡礼に茶や豆の接待をする。観音堂のある部落には組の組織が行われているが、この場合に部落は七つの組に分かれていて、彼岸の一日をそれぞれの組で接待するのである。藩政時代の相良侯は、球磨のあちこちに三十三の観音堂を設立するように決めたといわれ、これを巡礼が彼岸の一週間に一回りするのであった。一説には、藩主が彼岸の間に家来を変装させて収穫前の米の状態を視察して各村がどれだけ領収の倉庫に降納しうるかを予測するために、この慣行が採られたのに由来するともいう。今日でも巡礼は彼岸のあいだに女たちから米や豆の接待を受ける。

1935年には須恵村から巡礼に出る者は誰もいなかったが、以前にはいろんな人が出かけた。一団をなして行くのが普通だが、徒歩のほかに自転車で行くものもある。堂につくと観音に額づけて賽銭を上げ、御詠歌を唱える。時には年老いた職業的巡礼はながながと説教することもある。概していえば巡礼者の数は毎年減少していく。」（107～8頁）

②「黒肥地村には安産に特に霊験があると言われる観音があり、彼岸の中日には付近の村からここへ参拝に来る者が多い。それは薬師さんの日に上村の薬師さんに参拝に行くのと同じである。どの人も着飾り、若い人の楽しみになっている。」（241頁）

須恵村には、二つの観音堂（覚井観音と上手観音）がある。両者はともに22番札所で御詠歌も同一である（覚井観音堂は、エンブリーの時代には別の場所にあった。どうして、そうなのか）。

覚井観音と上手観音は、両者とも、以前には、「三十三観音巡り」の札所でなく御詠歌もなかったという（溝下昌美「荒田観音堂（錦町木上）の復活を望む」本誌9号50頁以下参照）。両者の御詠歌は21番札所の「永峰観音」（旧深田村）と同じである。同一の御詠歌が3箇所の観音堂で詠われているのである。御詠歌は、

いかなれば　鷲のみ山に、入る月の　すへのよかけて
猶てらすらん　（武親）
ときあかす　のりの教への　末かけて　くもらぬ影の
有明の海　（美辰）

で、明らかに「須恵（すえ）」を意識している。旧深田村の永峰観音で、なぜ、このような須恵を対象にした御詠歌が詠われているのかは一応問題になる。その理由に深く立ち入る余裕はないが、永峰観音は、旧深田村だけでなく、旧須恵村の人も一緒になって（共同で）祀っていたなど、須恵と深田とは、以前には、現在の行政区域とちがう地域区分であったと推測されるのである。

ついでながら24番札所も2箇所ある（生善院観音と龍泉寺観音）。したがって、現時点では「三十三

覚井観音
エンブリーの時代には別の場所にあった。昭和52年の県道拡張工事にともない、現在地に移動

上手観音

観音巡り」の札所は33箇所でなく35箇所存在する。どのような理由から、いつごろ、札所に重複が発生したのか別に検討すべき課題で、ここではその問題にも立ち入らない。

問題はエンブリーである。彼は、覚井観音と上手観音のどちらに注目したのであろうか。両者をともにあろうか。永峰観音も念頭に置いているのであろうか。引用文①は三十三音巡りの接待係を須恵村の「組」組織の役割の一例として解説し、引用文②は四季の行事として三十三観音巡りを位置づけている。上手観音と覚井観音がいつから三十三観音巡りの札所になったのかは分からないとしても、エンブリーの時代（昭和10年）に、どちらか（あるいは両者）が観音巡りの札所として認識されていたことだけは間違いない。牛嶌盛光『写真民族誌　須恵村、１９３５年～１９８５年』（１９８８年12月15日　日本経済評論社）82頁掲載の写真をみるかぎり、上手観音が当時すでに札所になっていることを確認できるが、覚井観音が札所でなかったとまでは断言できない。ついでながら同書は永峰観音を「石坂観音」と表記している。

エンブリーの文章をみると、接待の内容を「お茶と豆」とし、現在より質素であったことを知る。「豆」は「煮豆」を指すだろうが、豆の種類はわからない。原文が手元にないので「観音に額づけ」を文字通りに理解してよいかも判断できない。「御詠歌を唱える」慣習は現在では随分に衰退しているとみていいだろう。

三十三観音巡りの起源についてエンブリーは「一説」を紹介している。この説は現在でも有力だが、田中一彦『忘れられた人類学者』（２０１７年３月１日）は次の補足を加えている。「あさぎり町教委の専門家によると、相良藩の浄土真宗禁宗、幕府のキリシタン禁制が理由ともいう。『一向一揆が怖く、そちらに走らないように、地元に昔からある観音様のようなものを信仰しなさい、と相良藩の重鎮の井口武親、美辰が球磨郡を回ってご詠歌を作った。真宗は隠れ真宗になったが、藩の家老にも真宗がいて、村人を密かに集め念仏を唱えていた。だから一層信仰心が厚い。観音巡りは、藩の政治の安泰を狙うとともに人々の楽しみでもあった』とのことであった」という

ものである（３１２頁）。

エンブリーのいう「黒肥地村の観音」は栖山観音である。同観音はエラ夫人が須恵村の３人の女性とともに、昭和11年10月14日に巡礼している。同観音は常時開帳で、そのためその日に巡礼できたのであろう。朝７時頃に須恵村覚井を出発してから同地に到着するまでの間に交わされた女たちの「噂話」、観音堂での行動、同地での酒宴、写真撮影時の騒動など、エラの記録は詳細である。『須恵村の女たち』で１３９頁以下参照。岐部明廣『相良三十三観音巡礼』（人吉中央出版社２０１６年５月31日）３３８頁以下も参照。

栖山観音

谷水薬師

エンブリーのいう「上村の薬師さん」は「谷水薬師」を指すが、同薬師について彼は次のように説明している。「須恵村から約５マイルの上村の薬師は、球磨では有名である。六月の八日には郡のあちらこちらから老人が沢山やって来る。土用のはじめの丑の日には、若者がここ一番の晴衣を着飾って参拝する大きなお祭りで、薬師へお参りするのは若い青年男女の見合いにまたとない機会となっている。御賽銭はいつも一銭である。それで当番の「組」や僧侶は、銅貨の数によって参拝者の数をはかり知ることができる。」（２３１頁）。引用文②の「若い人の楽しみになっている」、上記引用文中の「薬師へお参りするのは若い青年男女の見合いにまたとない機会となっている」に注目しよう。こういう祭りは男女が「顔見知り（みしり）」になる絶好の機会で、「ヨバイ」（見合い）につながる場であった。

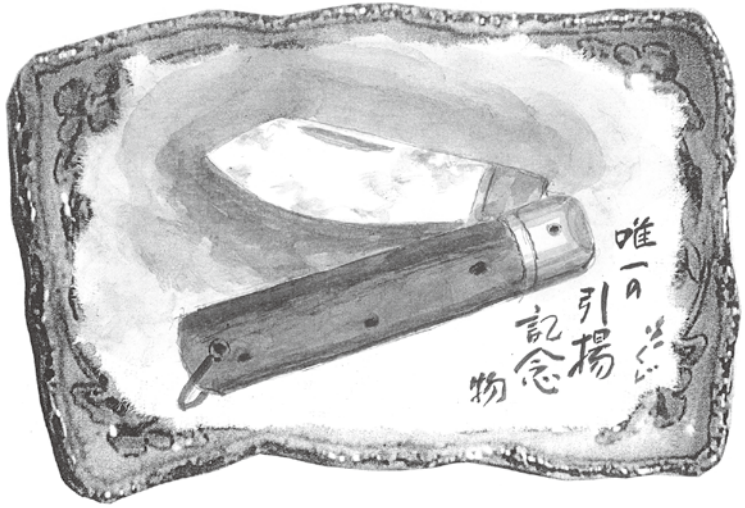
（春秋）

記憶の落ち穂

その㉙

絵と文／坂本福治

もの言わぬ友



小学三年の夏、平壌で終戦を迎え、その翌年の秋、祖国に向かって旅立った。最初の一晩はトラックで走り、夜が明けると、三十八度線に向かって歩くことになった。途中で何度も足止めされ、荷物を調べられては没収された。そばに銀製の道具を持つ家族がいた。「あなた、医者でしょう」と係員に言われたが、主人は頑として否定した。医者だったら引き止めたいのだ。その手前に私の父がしゃがんでいたが、後ろ手にナイフを持っていた。父は振り向きもせず、何も言わない。私はとっさに「これはお前が持っておけ（見られたら面倒になる）」と父が言っているのだと思い、そっと受け取ってポケットに入れた。

それから国境越え、米軍テント村、貨物列車、釜山からの引揚船、博多から国鉄、母の里天草へのポンポン船。父が生まれた水上村に落ちつくまで、ナイフは一度も使わなかった。私がナイフを父に見せると、「まだ持っとったんか」と目を丸くした。共に歩いた友だったのだ。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】

特集　ジャーナリスト伊勢戸明

9月9日創刊の意味

人吉・球磨の週刊情報誌

地域有志と人吉中央出版社が創刊

「文化や人物 掘り起こしたい」

人吉市の人吉中央出版社（伊勢戸明社長）は九日、人吉・球磨の週刊地域情報誌「週刊ひとよし」を創刊した。先月、地域のさまざまな分野の有志約五十人が集まって発足した「人吉球磨総合研究会（北御門二郎さんら代表四人）との共同企画・編集。伊勢戸さんは「人吉・球磨の独特な文化や人物の掘り起こし、戦後総括にも力を入れた骨太の文化情報誌を目指したい」と張り切っている。

「週刊ひとよし」を手にする伊勢戸さん

創刊号では、人吉市の青井阿蘇神社神職でタウン情報誌の編集もしている福川義文さん、保母でラジオ番組のキャスターも務める同市の桑原史佳さんを紹介。秋祭りの紹介記事、古い町並みや地名の考証に関する専門家の寄稿、書や絵画の誌上賛助展、エッセーなどで構成している。

さらに裏表紙では、終戦直後に一年余り発行された週刊の旧「人吉新聞」を復刻して二部を紹介。この企画は二号以降も続ける。

伊勢戸さんは昨年一月に地元の人吉新聞社を退職。同八月に人吉中央出版社を始め、情報誌の発行準備を進めていた。

「週刊ひとよし」は一部三百円。創刊号の発行部数は六部。定期購読者には一カ月千円で配達する。問い合わせ、申し込みは人吉中央出版社＝0966（23）2580。

「週刊ひとよし」の創刊を報じた西日本新聞の記事より（1997 年）

本誌の前身である「週刊ひとよし」は、21年前に創刊された雑誌である。発行人の伊勢戸明（いせとあきら）が何故9月9日の創刊にこだわったのか。自社の歴史を取り上げることには迷いがあったが、かつて日刊紙・週刊誌・月刊誌が共存していた頃の人吉球磨地域の活字文化の状況を紹介すると同時に、地域ジャーナリズムにこだわった伊勢戸明の仕事を振り返ってみる。

伊勢戸明氏の略歴

1933年（昭和8）朝鮮ソウルで生まれる
1951年（昭和26）大分第一高校卒業
1955年（昭和30）東京教育大（現筑波大）中退後、大分新聞社入社
1958年（昭和33）9月9日、人吉新聞創刊
1968年（昭和43）事業法人化で常務取締役報道局長
1996年（平成8）同社を退職、人吉中央出版社創設
1997年（平成9）9月9日、文化情報誌「週刊ひとよし」（毎週日曜日）を創刊
2010年（平成22）4月13日、77歳にて永眠

伊勢戸明の仕事

日刊　人吉新聞

人吉は人口10万人に満たない小都市である。この小さな街に日刊の新聞がある。『日刊人吉新聞』である（最初は週刊として出発）。

毎日、新聞を出す。想像を絶する仕事だ。事件・事故・行事はかぎりなく発生し、夥しい情報を整理・選択・把握・取材し、直ぐに、それを記事（文章）にまとめ、記事として残すものの優先順位を決め、それを紙面に配列し、全体の枠組を決め印刷にまわし、発送・配達する。それが最低限の仕事になる。気が遠くなりそうになる作業である。苦労して発行しても読者が記事に満足せず購入しなければ、新聞はただの紙切れになる。記者・編集者・印刷職人・配達者も生きた人間であって、新聞が売れなければ、すべての苦労は水泡に帰す。販売＝収入はジャーナリストにとって絶対的に必要であろう。金持ちになる必要はないにしても、新聞発行は趣味ではできない。それは、まちがいなく、「商売」である。

伊勢戸は、故石蔵正次とともに、その道に進んだ。伊勢戸は大学中退後に大分で新聞の仕事をしていたが、石蔵に請われて、人吉に移り住み、「日刊　人吉新聞」を創設したのであった。それだけ石蔵が魅力的存在であったのであろう。石蔵を追悼する一文を伊勢戸は残しているが、当時の雰囲気とともに、石蔵に対する敬意がそこには込められている。長文になるが、それを引用しよう。

『人吉新聞』創刊の夏

昨年末逝去した今の（日刊）『人吉新聞』の創始者、石蔵正次さんに誘われて初めて人吉の地を踏んだのは、昭和三十三年七月二十一日の夕方。クレーン越しの強い西日が土ぼこりを介して原木満載の馬車と破れ帽の漢を直射し、鼻つきのバスが所在なげに客待ちしていた景の残像が、その夜の鉢いっぱいの素麺とたしかに肉のかたまりもあったカレーの膳とともにある。石蔵さんに誘われたのは、石蔵さんが、ある人に要請された新聞作りのためのノウハウを、いずれ外注することになる印刷所にかけあうこと、あわせて編集の一員として手助けすることにあった。が、肝心の〝ある人〟の態度はあいまいで、何の見通しもないまま、井戸さらえや庭掃除やらの下人奉公よろしく、無駄に日を送ったのだから、あの夏は暑かった。

業を煮やした石蔵さんが自費刊行を決意、その意気に感じた若い印刷社主にまみえたのは九月に入ってから。週刊というだけで「そんな無謀なことを」との反発を買う一方、あれこれと編集方針に注文をつける人も出てきて、反応の大きさに気を良くした二人は、青井神社横の営林署長官舎玄関前で起きた無理心中事件にとびついた。

新聞創刊の予告を刷り込んだ心中事件の号外を、石蔵さん夫妻と手分けして人吉市内三つの橋のたもとで配った「九月」から四十年、石蔵さんがめざした地域住民のための新聞は近く紙齢一万二千を迎える。

相手構わず噛みつくというので「はしか犬」と罵られ、「また、かんじん新聞か」と蔑まれながらも決して屈することなく「守旧」を打破し続けた石蔵さんに、「地域新聞のこれから」を聞くすべはないが、盆地を覆う暗雲のような無気力には切歯扼腕の顔を歪めるに違いない。四十年前のあの待機の日のように。

（1998年9月6日）

引用文では「9月」だけ書いてあるが、正確には、同年9月15日に同紙創刊号を発行し、「守旧」を打破しつづけ、現在では人吉球磨の言論空間をリードするまでにいたっている。その旗印は「進歩と民主主義」であった。そのとき伊勢戸は25歳。石蔵正次という魅力的人物がいたといえ、新聞発行のために人吉に移り住み、見ず知らずの土地で新聞を発行することは25歳の若者には容易ではなかったろう。

平成8年（1996年）1月3日に人吉新聞社を定年退職するまでの38年あまり同社で仕事をした。その仕事の軌跡を追う余裕はないが、記者・編集者・コラムニストとして次第に実力を身につけ、人吉球磨の言論界の第一者と目されるまでに至ったのであった。同社を定年退職した後も出版人としての志は強まることはあっても緩むことはなく、退職直後に上村重次『字図で見る球磨の地名』を発行、翌年9月9日には人吉中央出版社を創設し「週刊ひとよ

し」を発行するにいたる。そのとき伊勢戸は64歳。高齢というわけではないにせよ、週刊誌の発行責任者としてみるとき決して若いというわけではなかった。それでも伊勢戸は人吉新聞時代と同じく記事を書き、コラム（「くま春秋」）を書きつづけた。

人吉新聞と週刊ひとよし時代に彼が書いた記事数はあまりにも膨大で確認しようもないが、コラムだけをとっても、人吉新聞の「瀬音」、週刊ひとよしの「くま春秋」の両者を合計すると８０００本を超える。ジャーナリスト・伊勢戸明の輪郭を把握するためには、最低でも、この８０００本を超えるコラムを読み込まなければならない。

「週刊　ひとよし」創刊

前記のように、64歳の平成９年９月９日に、彼は「週刊ひとよし」を創刊したが、そのときの巻頭言に次のように書いた。

創　刊

「本誌は休刊であって廃刊ではありません。従って人吉文化研究会の解散ではありません。いつか時を得て文化誌が芽をふくことへの窓は大きく開いておきたいと思います」こんな言葉を残して通算十一年間の活動にピリオドを打った『人吉文化』の遺志をも継ぐべく、きょうここに『週刊ひとよし』の旗を掲げる。

創刊の日に平成九年九月九日の三つ並びを選んだのは、重陽の賀にあやかるというより、三重苦にも耐えてみせようとの、いささか向こう見ずの気負いがあってのこと。だから当分は年甲斐もない武者震いをかくせそうもないが、人吉球磨総合研究会発足の場に見た同憂の士の義憤のためにも、いっときも早く「ことば」を文字にしなければと、精一杯のアクセルを踏み込んでみた。

そこで思い出すのは、「ことば（文字）になったときにはウソがある」との自戒を掲げて謙虚な一生を貫かれた『人吉文化』の発行責任者、故・種元勝弘先生のことだ。三十年前の文化誌『人吉文化』は、人吉文化研究会の発行ではあったが、経営の責任は一切、先生個人に課せられていた。先生は文化誌が広告をあてにしてはせっかくの志が堕落するとして、当初は一切の広告を拒否する純粋さに徹した。そんな先生の心意気と同好の執筆陣の支援で十一年もの奮闘が続いたのだが、結局は経済の高度成長が仇となった。

限られた購読料とわずかの篤志では天井知らずの経費の高騰に抗することあたわず、さらには入手難で雑誌の配本集金さえままならなくなった。そのくだりは、前述の「休刊のことば」に述べられていて、今読んでも痛々しい。

無論、時代は変わった。だが前車の轍は貴重な教訓である。気負いもほどほどに、「くま春秋」のページを開こう。

（１９９７年９月９日）

「人吉文化」の遺志を継ぐとの宣言の正確な意味を把握する能力はない。しかし、彼のいう「三重苦」は明確である。本人によれば第一に運営資金の調達、第二に人材（スタッフ）の確保、第三に情報（原稿）の収集である。伊勢戸はそれを自覚したうえで「週刊ひとよし」の創刊を決意し、「9月9日」をあえて創刊日にしたのであった。

「9月9日」には別のこだわりもあった。1年前の平成8年9月9日に伊勢戸は母を亡くしていた。大分から人吉に居を移すときに母は息子にしたがっていた。また、人吉新聞創刊前の「号外」発行日が昭和33年9月9日であった。

問題は、いうまでもなく、「週刊ひとよし」がその創刊目的を達成されたのかにある。その目的はあまりにも高邁故に即断すべきではないけれども、同誌を一瞥するとき、予想以上に濃密な原稿に恵まれたのは確かだろう。終戦直後からの人吉球磨地方の文化活動を歴史的に辿る作業を進めたのはその代表例である。多数の原稿を掲載し、人吉球磨の人材育成に努めている。トルストイの『文読む月日』の一節を掲載し同誌創刊の目的のひとつとして堅持し、『トルストイ短編集』三部作の刊行という地点に至った。

「週刊ひとよし」から「月刊くまがわ春秋」へ

意気軒昂の伊勢戸であったが、人生は非情である。志半ばのもとで、彼は病に倒れ、平成10年（平成22年）にこの

世を去った。享年77歳。

人吉中央出版社の社長、「週刊　ひとよし」の発行責任者の逝去である。スタッフ一同の動揺は強いものであったと推測するのだが、スタッフの心は折れることなく、その後も、出版活動をつづけ多数の著作を出版し、「週刊ひとよし」を「月刊　くまがわ春秋」に変更する調整を図ったうえで、地域誌重視の姿勢を堅持し、現在に至っている。それは前田一洋などの人吉球磨総合研究会の協力、松本学をはじめとする同社スタッフの志の高さ、それを支えたいとする読者の存在によるものであろう。

しかしながら出版不況は根強く、人吉中央出版社もその逆風に直面している。そのことは伊勢戸も意識していた。しかし、いまや、伊勢戸の認識を超える状況に至っている。ネット社会の到来である。それは紙文化中心の環境を一変させた。たとえば、この10年で全国の新聞紙の販売部数は10分の1に激減した。伊勢戸は「三重苦」を語ったが、現在は、媒体の変化と労働者の購買力低下を加えた「五重苦」の時代かもしれない。

それでも地方紙・誌の存在意義は失われていない。ネットを媒体にするだけは伝えられない、表現できない情報が地域には残っている。暗中模索、五里霧中ながらも、これからも、したたかに、泥臭く、地域文化を耕していかねばならない。

川辺川問題

伊勢戸明の業績は多岐にわたり、それを簡単には要約できないが、人吉中央出版社創立22年である。彼の業績にまったく触れないわけにはいかない。本号では、伊勢戸が殊に関心を寄せた「川辺川」問題をひとつのテーマにするとともに、「22年」の重みを感じさせる方針で編集した。人吉中央出版社創設「22年」は多くの人にとって大きな意味があるにちがいない。一言三言でも語りたいみなさんが山のようにいらっしゃるであろう。こうしたみなさんには、大変申し訳ないが、すべてを重々承知したうえで、本号では、執筆者を限定させていただいた。「漏れ」が生じるのを避けるためである。

（敬称はすべて省略した）

上村雄一（編集主幹）

球磨川と短歌を愛した伊勢戸さん

宮原信晃

今から8年前、人吉おおくま座の会は球磨川下りの発船場に歌碑を造る事にした。

どうしても今作らなければならない理由があったからだ。それは、ダム建設反対の声が大きな力となり、相良村の徳田村長、そして人吉市長である田中信孝氏がダムの白紙撤回を表明したものの、市民レベルでは浸透に欠けていたからだ。

文化的に歌碑を残すことこそ、市民レベルまで自然を愛する力が広まると考え、伊勢戸明氏を含む18名の有志が集まった。春の球磨川下り初下りの日にこの歌碑は建った。

賑やかな初下りの場に伊勢戸氏の姿はなく、残りの者たちが華やかに歌碑の披露の場にいた。

伊勢戸氏はそれからまもなく、我々が見送る船に乗って浄土に向かわれた。

我が船に別れがたしと水掛けし
人見ゆるなり　なほ水上（みなかみ）に

与謝野晶子

【みやはら・のぶあき／人吉おおくま座の会事務局長】

11 基目の与謝野晶子歌碑の除幕（2010 年 3 月 1 日、球磨川下り人吉発船場で）

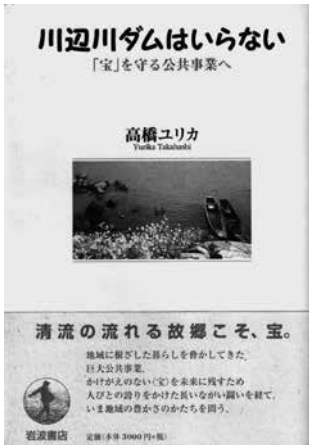
おおくま座のメンバーとして伊勢戸さんの名も刻まれた

「週刊ひとよし」の
連載から生まれた本

高橋ユリカ著
川辺川ダムはいらない
――「宝」を守る公共事業へ

（岩波書店　2009）

高知大学 助教　森　明香



「私は、これは川辺川ダム問題の決定版だと思っています」。2009年10月3日に九州大学で行われた社会技術社会論シンポジウム「現代の安全・環境論争とその科学的位相――西日本の大型開発事業をめぐって――」の主催担当者であった吉岡斉先生①は、登壇者のお一人だった高橋ユリカさんの著書をこう評することで、彼女を紹介した。

ユリカさんが初めて人吉・球磨を訪れたのは1996年8月。自身のがん治療の体験を踏まえて看護専門誌に医療ルポを執筆する中で、熊本県相良村の緒方俊一郎医師と出会う。山中への往診に同行取材した際、その地域が川辺川ダム建設により水没する土地であることを知る。当時、東京には川辺川ダム問題に関する報道はほとんどなかった。

その後10年以上にわたって川辺川ダム問題を取材するなかで、東京出身であるユリカさんは、地方と東京のギャップや、地方が国によって抑圧されている現実を目の当たりにしてショックを受けた。ダムの水はいらない、ダムは水害を引き起こし鮎を不味い魚にしてしまう、という人吉・球磨の切実な声が東京にまで届いていないこと。さらには、東大出身者をはじめとする優秀な人が課題解決に向けて真摯な仕事をする場所だと思っていた永田町・霞ケ関で、実際にはそうはなっていなかったこと。それでもユリカさんは『世界』や『ミセス』など各方面での執筆を通して現場の声を伝え続けた。

「なぜ、彼らが生活している目の前の球磨川のことについて、わざわざ、東京に出向かなければならないのだろうか」とユリカさんは本書で述べている。厳しい行政と向き合うことでしかなし得なかった「ダム反対運動」を、未来に手渡すべき自然を壊している世代の責任として受け止め記録することで、「川辺川ダム」問題を東京から考え続けようとしたのである。本書を読むと、ユリカさんがどんな思いで現場に通って地元の方々の協力を得ながらお話を聞いていたのか、取材したことを記録し発表してきたのかが、よく伝わってくる②。

高橋ユリカさん（右）と私

本書が伊勢戸明さんとどのような所縁のあるものだったのかについても言及しておきたい。本書は『週刊ひとよし』に2007年5月27日から2008年4月27日まで43回にわたって連載された「ダム取材10年の証言」をベースに編まれた。『週刊ひとよし』の編集代表だった伊勢戸明さんと会話を交わし、彼が「地元の私達にはない、いくつかの『新しいよそものの目』を感じた」ことをきっかけに長期連載が始まったという③。元々単行本化の話はあったというが、本書のエピローグには「（本になる前の）大事な時期に地元とウェブサイトでの原稿発表は幸いであった」と伊勢戸明さん、松本学さんのお名前を挙げて謝意を著しておられた。筆者は以前、一度だけ伊勢戸さんにお話を伺ったことがある④。川辺川ダム問題をめぐる話の中で、人吉・球磨には外部の人たちによって変化をもたらされている側面があることを教えてくださったことが強く印象に残っている。

本稿を書くにあたり、『週刊ひと

よし』、『くま春秋―人吉・球磨を見つめつづけて』を読み返し、フィールドノートを引っ張り出し、改めて考えていた。「地方から中央を変える」「地域のための新聞にしたい。ただし各人により〝地域〟の定義が異なるからこそ、個人を主語とした新聞を目指したい」と考えておられたという伊勢戸さん⑤。五木村の水没予定地に通って筆者がお話を伺う中で、伊勢戸さんは熱心に通っていらした記者さんのお一人、との証言に触れたこともあった。ご自身も「よそ者」で地域の方々の思いを大切にしながら問題に向き合い続けようとされたからこそ、ユリカさんに思い切って依頼したのかもしれない。

【もり・さやか／高知市】

【注】

①九州大学教授。科学史・科学技術政策が専門。２０１８年1月、64歳で逝去。

②高橋ユリカさんは２０１４年８月20日の早朝に逝去した。八代市のつる詳子さんによるメーリングリストへの投稿を通して知り、ご連絡をくださった熊本の方々の分までとの思いで、筆者はお別れに伺った。少し痩せられたユリカさんはまるで眠っているようだったことを覚えている。会場の一角には川辺川ダム問題を含む著書や、雑誌が数多紹介されていた。ご対応くださった息子さんは、ご自身も一度川辺川でカヌーをしたこと、ユリカさんの携帯アドレスが「だいすきかわべがわ」だったことを教えてくださった。

③『週刊ひとよし』２００８・４・27：19頁。

④２００６年８月31日、球磨病院ロビーにて。

⑤２００６年８月31日、球磨病院ロビーにて実施のインタビューメモ。

「週刊ひとよし」の連載から生まれた本②

『週刊ひとよし』と私の二〇年

八洲開発株式会社 木﨑文化財調査室長　木﨑康弘

確か、人吉中央出版社の『週刊ひとよし』が創刊された年の、一九九七（平成九）年の出来事だった。ただ、何月何日だったのかは、控えの習慣がないものだから、覚えはない。それでも察しはつく。おそらく、盆で帰省していた時のことではなかったか。多分、間違いないが、深入りはせずに、振出しに戻そう。

妻あい子の父、渋谷敦さんから、こんな話を聞いたのだ。

「伊勢戸明さんが人吉新聞社を退職しなったが、創った人吉中央出版社から週刊の情報誌バ出すちゅうてバイ。『週刊ひとよし』…」

それが『週刊ひとよし』を初めて聞いた場面。しかもその中に出てきた伊勢戸明という名前も、当然知ってはいたが、それまで面識もあまりないお方。お名前の方は、よく義父の口から出てくる、馴染み深いものだったが、それまでも、またそれからもお目にかかる機会は、それほど多いわけではなかった。そうだとはいえ、お会いすることもないわけではない。その中で一番印象深かったのは、株式会社郷土出版社が二〇〇七（平成一九）年九月に発行した『図説 人吉・球磨の歴史』の編集会議の席だったろう。球磨川添いのお店の一室で、そこには、監修者の義父と編集顧問の前田一洋先生、そして六名の編集委員の面々が揃っていた。そのメンバーの中に、伊勢戸さんもいたのである。おそらく、それが、御尊顔を拝した最後の機会ではなかったか。二〇一〇（平成二二）年には伊勢戸さんが逝き、さらに二〇一一（平成二四）年には義父もこの世を去ってしまった。

確かに、この二〇年間には、私の周りでも色々なことがあった。もう少し振り返ってみよう。

一九九八（平成一〇）年九月は、熊本県教育庁からに知事部局出向して二年目だった。熊本県文化企画課の県立博物館プロジェクトに参画し、日々忙しく動き回っていた。二〇〇〇（平成一二）年二月には、明治大学から博士（史学）号を取得。その四月には、古

巣の熊本県文化課に籍を移した。それから、今日までの仕事場は、実に目まぐるしい。県文化課（三年間）、装飾古墳館（三年間）、温故創成館（三年間）、県文化課（二年間）、装飾古墳館（六年間）、県文化課（六か月間）、そして八洲開発株式会社（一年間）だ。また二〇〇九（平成二一）年には、群馬県みどり市から第一八回岩宿文化賞も頂いたし、二〇一七（平成二九）年には無事定年退職を迎えた。私の人生の中で、これほど変化に富んだ時間を過ごしたことは後にも先にも最初で最後になるだろう。それほどに充実し、印象深い二〇年でもあったのだ。

そこで考古学者の習慣でもある、この二〇年間を区切ってみることにしよう。

最初の区切りは、二〇〇〇（平成一二）年だった。その年、ドクター論文『九州ナイフ形石器文化の様相』を明治大学に提出。卒業論文の指導教授で恩師の戸沢充則学長から学位記を頂いた。その場面は、未だに新鮮で、忘れることを忘れるほどだ。明治大学を卒業して、先土器時代研究に取り組み始めてから二〇年後に訪れた、まさに晴れがましい瞬間だった。

次の区切りは、二〇一一（平成二三）年で、肥後の考古学史研究、平たく言えば、肥後では原始・古代の歴史がどのように研究されてきたのか、を跡付ける研究に打ち込み始めた年だった。装飾古墳館に赴任した、その年の六月、アメリカ人鉱山学者ライマンに関する貴重な文献をひょんなことから入手した。それがことの始まりだった。そして、それが呼び水となって、坪井正五郎や寺石正路、闡幽舎主人ら、数多くの学者たちを肥後の考古学史の中に誘った。その成果の発露は、時に論文であったり、随筆であったり、講演であったり、新聞紙上であったりと様々。その中でも、特に回数がこなせたのは、前田先生のお声掛けで始めた「球磨の考古地誌」の連載。そしてその極みが、昨年の『肥後と球磨、その原史世界に魅せられし人々―肥後と球磨の考古学史―』ではなかったろうか。

そんなこんなと跡付けてきた二〇年ではあったが、もう一つ。そんな拙著が本年三月に第三九回熊日出版文化賞の栄誉に浴したことも不思議な縁ではないか、と感じ入っている。まさに『週刊ひとよし』創刊二〇周年に当たる年だからだ。

そして最後に、私の二〇周年もあるので、僭越ながら披露させていただこう。その年は、東京オリンピック・パラリンピックが開催される二〇二〇年。何あろう、博士号の取得から数えて二〇年目の年に当たっている。また、繰り返しになるが、先土器時代研究を本格的に始めて、二回目の二〇周年でもあるのだ。さらに、二〇の繰り返しも実に愉快である。

ということで、それらを記念する企てを模索し始めた。ドクター論文の単行本化がそれだ。これによって私の先土器時代研究に一つのピリオドが打てる、新たな二〇年に踏み出せると。そんな想いが沸々と湧いてきたので、今暫く考古学研究を楽しんでみたいと思う。

【きざき・やすひろ／熊本市】

「週刊ひとよし」の連載から生まれた本③

小さなメディアの大きな仕事

坂本桃子

地域の話題をいかに外へ発信するかということにこだわっていた私にとって、そもそも坂本町のケーブルテレビ局でお仕事をすることは、私の信念とはズレていました。自分が制作した番組を視聴することができるのは、坂本町内１５００世帯程度のみ。

いまや都市部からたくさんの若者が移住や地域おこしを目的に、地方の田舎へやってくる時代です。彼らは間違いなく、その地域が発信している情報をインターネットや紙媒体、メディアなどあらゆる手段で隅々まで確認し、自分の理想に合った地域を探しているのです。そんな時代なのに、うちのケーブルテレビはインターネット配信もしておらず、「はあ、なんて時代遅れ！」、「この地域で起こった出来事を、この地域の住民へ発信して、そんなにメリットがあるのだろうか。」と、入社した頃は一人悶々とした気持ちで仕事に向かっていたことを覚えています。

しかし、ある日そんな私の価値観と意識がガラっと変わる出来事がありました。それは、取材でお世話になったとある集落のご高齢のお母さんとお話をしていた時のことです。「桃ちゃん、あんたは坂本の山奥まで行ってどこそこ取材してくるね、私は坂本におって今まで一回もあやんとこころには行ったことがなかとよ。運転もしきらん、今は足も動かん、もうどこも行きゃきらん。ばってんあんたが代わりに行ってくれるけん、テレビでみられるけんよか～。ありがたか～。」

その話を聞いたとき、私ははっとしました。そうか、おばあちゃんたちは坂本で生まれ育っているにも関わらず、行ったことのない場所もたくさんあるのだ。そしてもう随分ご高齢になってしまった今、どこへも行くことができないのだ。私が深水や鮎帰や中津道の奥深い集落を散歩している様子をテレビで視聴することで、まるで自分がその集落を歩いているかのように、追体験をしていたんだ。それまで、外への発信ばかりに気をとられていた私にとって、まさに青天の霹靂。

それからは考え方が１８０度変わり、坂本のみなさんにいかに坂本のことを知ってもらうかということに重点を置くようになりました。後からだんだんわかってきたのですが、坂本は元々３つの村が合併してできたため、地域ごとの特色が豊かで文化や方言、考え方も少し違っていたりします。実は坂本っていろんな民族が住んでいるといっても間違いではないくらい、まるで宇宙のようにひろくて無限大な地域だったのです。だから同じ坂本でも少し離れている集落のことは別の国の出来事かのように興味を持ってくださり、本当に豊かで魅力ある祭りや人材で溢れていると取材に行く度に感じています。

最近はどうしても外への発信が重要視されていて、ヨソモノやワカモノやバカモノに知ってもらってうちの町に呼び込もう！　インスタ映えする写真を載せよう！　だなんてみんな言っているけど、本当はそんなことよりも今実際にここで生きている人たちの日々の暮らしや故郷への想い、気持ちに耳を傾け、寄り添い、それを同じ町で暮らしている人たちに伝えることはとっても意義のあることなんだと、この仕事を通じて気づかされました。

その町が輝く一番の近道は、住民自身が自分の町のことを知り、興味を持ち、そして町を愛し、誇りを持つことではないかと私は思っています。そしたら自ずと人も集まってくるのかもしれません。

そういう意味では、地域に密着したうちの小さなメディアにしかできないことがまだまだたくさんありますし、やりがいのある深い仕事だと感じています。そして、そんな仕事にめぐりあえた私は本当に幸せ者だなあ～と思っています。

【さかもと・ももこ／八代市坂本町】

これがクライマックス？

鶴上寛治

クライマックスって何？　国語字典には最高潮、英和辞典のclimaxも最高潮・絶頂と訳語が書いてある。日本のプロ野球にクライマックス・シリーズがある。セ・パ両リーグとも、年間成績（勝率）の二位と三位のチームが戦い、その勝者が一位のチームと争い、それに勝ったチームが日本シリーズに出場できるのだ。それなら、その日本シリーズこそがクライマックスじゃないか。その予選みたいな試合は敗者復活戦に過ぎない。下位リーグへの格下げ決定戦？　――勝率五割以下のチーム同士の闘いだもの。「そんな試合を観てどうする」と言いたいところだが、勝負は水物、三位のチームが勝ち上がって日本一になったり（下剋上）することもあるから面白い。敗けたチームは面目まるつぶれ。戦犯を探し出し、見せしめにその選手を処分したくもなろう。

今年のセントラル・リーグ――まさに年間勝率五割以下の二チームが戦うことになりそう。そんなもののどこがクライマックスか！　そもそもこれは年間最高勝率の優勝チーム決定後のレギュラーシーズンの試合が無気力消化試合になり、観衆を呼べないのでこれを設定したらしい。ファンはプロならではの技を堪能したくて球場に来るのだ。ひいきチームの応援をしに行くだけではない。それなのにシーズン末期に年間打率を下げぬため、有力選手を休ませたりして、彼のプレーをファンに見せないのは詐欺行為だ。セコいのだ。スポーツというものはあくまでフェア・プレーが売り物のはずだろうに。

アメ・フトを発端にレスリング・ボクシング・剣道（居合）など続々と不祥事が。政界（首相官邸・一省だけじゃない）・大学入試・書道・大相撲でも似たようなもの。こちらにはもともと正義の存在など期待していなかった。…これは言い過ぎた。ここの数行は削除。（簡単に削除すればそれでいいのか？

あまりにも言いたい放題な世の中。表現の自由はあるがもう少し考えて発言せい！　政治家もあなたも）

セ・リーグのクライマックス・シリーズでは、せめてどちらかのチームでも勝率五割を超えていて欲しい。この不名誉な数字が後世に笑い草として残るのは情けない。後世の人から「誰もクライマックス・シリーズのことを批判しなかったのか？」と言われぬように私が書き残す。

【つるかみ・かんじ／人吉市】

虫の世界

武井京子

夏になって野菜も元気に生長しているが、困ったことに虫類も繁殖しはじめた。まずウスカワマイマイ（薄皮蝸牛）。小さなカタツムリで、繁殖の様子がすさまじい。ナスやトウモロコシの葉の裏に五、六匹食いついている。一匹ではわずかな面積しか食べないが、何匹もいるのでオクラの葉などはスカスカになるまで食べ尽くす。キュウリの葉、ルッコラ、インゲン、ネギと、あらゆる葉を食い荒らす。毎朝、葉をめくって虫を取るが、小さいのは指で潰している。解体に来たおじさんが、カタツムリの中には病原菌を持つ寄生虫がいて、やたらと手で触ったら危険だとテレビで言っていたと聞き、これからは手袋をして処理しようと思った。昔こんな虫はいたかしら、天敵はいないのか。昔は殺虫剤とか使わなかった思うが、確かめる術がない。

ある朝、カエルがトウモロコシの葉の間にいたので、虫を退治してくれないかと期待したがちょっと臭いがきつい。マイマイカブリはカタツムリを食べるらしいが、あまりお目にかからない。

昨秋、カマキリの卵は鳥かトカゲかわからないが、ことごとく食いちぎられていたので心配していたら、何匹か畑で見かけたので生き延びていたらしい。アブラナの葉にはオレンジ色の亀虫がつき、葉を吸い枯らすが、これらはカマキリが退治してくれる。この亀虫も繁殖が旺盛で困ったものだ。

瓜類には瓜虫が幼苗を吸い枯らす。これにはペットボトルで保護して、大きく育てば葉が硬くなって虫の方も諦めてくれる。キャベツは青虫に負けるので植えないようにしている。

どの野菜にも虫がつくので、丁寧に洗わないといけないので困ったものだ。それでもキュウリやナスやシシトウが少しずつでも収穫できるのが楽しみだ。

庭木の松には松毛虫が大量発生して枯れたようになり、下に糞が落ちていたので、主人が三日間木登りして退治してくれた。松の芯つみならぬ虫切り、大きいのは十cmほどにもなる。最近やっと緑がかって見える。天敵のいない虫を国に入れないこと、天敵を大事にすることが肝要だ。

【たけい・きょうこ／人吉市】

人吉藩の大水害②

宝暦五（一七五五）年 前代未聞の大洪水

尾方保之

前回は、正徳二（一七一二）年の大洪水について紹介した。この大洪水では胸川と球磨川が氾濫し、城内をはじめ城下町に濁流が流入し、青井社楼門が一・二mも浸水した。城内や人吉町は舟で往来したという。

今回は、この大洪水を超える〝前代未聞の大洪水〟と言われる〝宝暦五年の大洪水〟について紹介したいと思う。

球磨川、常水に五・二m増水

宝暦五（一七五五）年の大洪水について、『探源記六』（人吉市立図書館蔵）は次のように記録している。（読み下し文）

「同年五月中旬比より雨降り続き日々止まず、然るに六月八日夜より甚雨雷鳴、翌九日夕方に至り漸く小雨に相成り、前代未聞の洪水也。数日の雨故土地涸れ往古より水付これ無き所水湧き、大手御門並びに御城外小路町方舟にて往行、人を助ける所多し。御城内石垣岸崩れ、其の外所々に破損所多く、流死人同牛馬、且飢人等これ有り、御救米出る。…」

これによると、五月中旬頃から雨が降り続き、なかなか止まなかった。ところが六月八日夜より激しい雷雨となり、翌九日、一日中降り続いた雨は、夕方にやっと小雨になったが、前代未聞の大洪水が発生した。数日の雨のため、水のない所にも水が湧き出て、大手門内をはじめ、城外の武家屋敷の小路や町方では、舟で往来し多くの人を助け出した。城内の石垣の崩れや各村々の破損が多く、また流死人が多く出たので、救助米が支給されたという。

『探源記六』によると、二十六代頼峯（志摩守）公は八月八日、御用番堀田相模守へ御城修理の伺い書及び御損毛、御破損所の御届書を提出した。

私領内肥後国球麻郡五月中旬より度々雨降六月八日夜中より雷雨甚敷翌九日洪水損失覚

一　水田　三百八拾三町七反八畝

内

一　百三拾六町六反三畝拾八歩　永荒

一　弐百四拾七町壱反四畝拾弐歩　當荒

一　畠　拾五町五反三畝弐拾四歩

内

一　六町九反六畝拾五歩　永荒

一　八町五反七畝九歩　當荒

一　城内曲輪岸崩　弐箇所

一　同　外曲輪石垣崩　壱箇所

一　流家　弐百壱軒　郷町

一　潰家　二百八十三間　郷町

一　潰堂　七宇

一　潰社　四箇所

一　潰寺　三箇所

一　落堰　五千弐百拾七間程

一　川除崩　壱万百四拾壱間程

一　道崩　六千三百九拾七間程

一　溝土手崩　三千三百四拾六間程

一　堤崩　五箇所

一　落橋　六拾六箇所

一　山野崩　壱万弐千五百弐拾五箇所

一　流木倒木　千三百拾八本程

一　流死　五拾四人　郷町

内

一　男　三拾四人

一　女　弐拾人

一　流牛馬　拾六疋

内

一　馬　拾弐疋

一　牛　四疋

一　増水　常水ニ壱丈七尺

右の通り御座候　御届申上候　田畠損毛高之儀者未相知候間　追而可申上候　以上

七月廿四日　相良志摩守

被害届によれば、水田三百八十三町歩余が大きな被害を受け、その三分の一の百三十町歩余が復旧不能な永荒（えいあれ）となっ

た。そして残り二百四十町歩余は、復旧可能な（当年限り年貢免除）当荒（とうあれ）の水田であった。この被害面積は、当時の水田面積（約三千六百町歩）の約一割に当たる。畠地の被害は少なかった。

人吉城内曲輪（うちくるわ）で二ケ所の崖（岸）崩れがあり、外曲輪（そとくるわ）では、一ケ所石垣の崩れがあった。

この大洪水は常水より一丈七尺（五・一m）も高い増水であったため、各地で大氾濫を起こし堰や川除（かわよけ）（堤防）、さらに道路や橋を次々に破壊すると共に、田畑や家屋に浸水し流失せしめた。流家二百軒ほど、倒壊二百八十軒余、落橋六十六ケ所となっている。山野の崩れもひどく、一万二千五百ケ所となっている。

この大水害によって五十四人が流死し、牛馬十六匹も流死した。これこそ前代未聞の大水害であった。人吉新聞「60年の出来事」によれば、昭和四十年7・3水害の被害として、死者二人、二十二戸流失、浸水二千二百戸と記している。宝暦五年の

現在の人吉城内北側石垣（高さ3.8m）

水害の被害が如何に大きかったかを知らされるのである。

飢人…八百九十七人

宝暦五年六月の大洪水で家屋の流失・倒壊で食糧を失った者が多く、彼らは飢人となった。

『探源記六』によれば、藩の菱刈源兵衛は八月八日、幕府に次のように届け出た。

「肥後国球麻郡六月九日大雨洪水に付いて、飢えに及び候者八百九拾七人これ有り候間、早速夫食下行申し付け置き候段申し来たり候。以上」（読み下し文）

これにより、八百九十七人の飢人がでたため、食糧が与えられ救助されたことがわかる。

藩は、また城内曲輪の崖（岸）の崩れと石垣の修理についても、修理願書を提出している。

二ケ月後、台風襲来

この大水害の二ケ月後の八月二十四日、台風が襲来した。その被害は、家屋の倒壊（潰家）八百八十八軒、寺社の倒壊十五ケ所、倒木三千八百本、死者三人となっている。

藩は、六月の大洪水、その後の虫付、そして八月の台風による被害の届を幕府に次のように提出した。

「領内六月九日洪水、其の以後水田虫付、八月廿四日大風雨損毛石高左の通り

一　高米　一万弐千八拾四石八升余　」

この損亡（毛）高は、米一万二千八十四石余となっている。これは主に年貢米の損失高を示している。当時の年貢米が約二万四千石だったので、例年の半分ほどが減損したことになる。享保十七（一七三二）年の大飢饉のときの年貢米収入は九千石余だったので、それに次ぐ減損額となるようである。

藩の年貢米収入が半分しかないと、武士の知行米や扶持米、役人などの扶助米が十分支払うことができなくなる。藩にとっても領民にとっても厳しい年となった。

八代萩原堤防決壊…溺死（できし）五百六人

六月九日の球磨川大洪水は、下流の肥後藩の八代地域にも大被害を残した。種元勝弘氏が「人吉文化50～51号」に紹介されている肥後藩の「被害届」によれば、芦北郡球磨川筋にある瀬戸山の崩壊による萩原堤防の決壊が、その原因であったという。

六月九日、瀬戸山が高さ二百間（約三六〇m）横百五十間（約二七〇m）崩れ落ち、川迎えにある山に高さ二百間、横百間（約一八〇m）ほど突きあげたため、この山も崩れ落ち、球磨川を埋めてしまい、そのため洪水が逆流し、水かさが三十～四十間（約五四～七二m）も高くなってしまった。やがてせき止めた土砂が水圧で押し流され、濁流が下流にあふれたのである。よって下流の堅固な萩原堤防がこどごとく決壊し、さらに濁流が八代平野に流れ込んだのだった。

肥後藩は、六月一日から九日までの大雨洪水と山崩れによる損毛破損の届を幕府に対して具体的に提出したが、その被害の主なものだけを上げると次のようである。

一　高　二十三万五百六十余石　潮入　石砂入　洗剥　山崩

　　此内　田　二万千七百五十三町余

　　畑　七千六百二十五町余

一　塩浜　九十七町五反

一　塩塘　三千四百十五間

一　流舟　百一艘
一　流失　蜜柑二百四十本余
一　流家　二千百十八軒
一　溺死　五百六人
一　怪我人　五十六人
一　溺死牛馬　五十八疋

約三万町歩の田畑が被害を受け、その損亡高が二十三万五百石余となっている。肥後藩の朱印高五十四万石（実高七五万石）の約半分の損害である。二千戸以上の家屋が流失し、五百六人が溺死した。肥後藩にとっても、宝暦の大洪水は、人吉藩以上の大災害で、これこそ前代未聞の大水害であったと言えるのである。

貸付金「手判銀」をめぐるお家騒動へ

宝暦五年の六月九日の大洪水によって、約五百戸の家屋が流失・倒壊し、約四百町歩の田畑が被災した。さらに五十四人の犠牲者が出ると共に、約九百人の飢人を生むという前代未聞の大災害となった。さらに二ケ月後の台風に依って約九百戸の家屋が倒壊するなど、大きな被害を残したため、年貢米などの損亡高は一万二千石余となった。例年の年貢米の半分ほどとなったのである。

この厳しい財政のもとで、藩は災害の復旧を進めると共に、生活に苦しむ武士や農民たちの救済に取り組まねばならなかった。

翌年の宝暦六（一七五六）年八月、家老たちは家中武士を御館に集め、生活の助成金として「手判銀」の貸付けを一同に提案した。多くの武士は希望したが、一部の上級武士は強く反対した。「手判銀」の貸付けをめぐって、藩内が二つに分裂し、お家騒動へと発展していくことになる。これが「御手判銀事件」（金家騒動）である。藩主を巻き込んだお家騒動は、藩主の暗殺事件へと展開していった。

【おがた・やすゆき／求麻郷土研究会、球磨郡錦町】

※訂正＝前回文末の餓人を〝飢人〟に、餓米は〝飢米〟にそれぞれ訂正いたします。

鶺鴒短歌会

八月詠草

八月忌遠い記憶をふりかえる灼熱の中玉音聞きしを
吾ここに五十路届かず逝くなれど香りて咲けよ子供たち
守永　和久

飲み過ぎて眠れぬ夜に又ビール意志の弱さ　自嘲しつつも
八月の十五日には手を合はす大戦の元凶伝へるべきと
河内　徹夫

冥福と平和を願い梵鐘を撞く各地に起こる災害思い
心地よく寝入る夫居て願ふなり心静かに厨に立てるを
中村美喜子

終戦は国民学校二年生辛苦なめたるわが身を想ふ
終戦のトラウマ抱え辛き目を今となりにては自己分析す
西　武喜

初盆の亡夫を待ち居るわたくしに子孫集り話がはづむ
玄関先草取りせずにをいた花お盆に咲いて亡夫を迎へる
釜田　操

友と逢い昔話に花が咲き時の経つのも忘れるほどに
久しぶり雨に恵まれ安眠す肌に感じる自然の恵み
中原　康子

遠い日に幼子連れて行きし河原今は居間にて花火の音聞く
久し振り畑に出れは雑草は強く根を張り悪戦苦闘
三原　光代

老い深くわが身近くに精霊船仏陀の説きし輪廻の夢を
納涼の花火と共に夏がゆくわが終活もそろそろ幕か
橋詰　了一

無事なれとひと匙ひとさじ食べさせる妻の笑顔に助けられつつ
亡き妻にひと夜ふた夜と添い寝しつ遠き想ひ出語り掛けたり
堀田　英雄

倉敷便り ㉑

津軽紀行 ㈢

絵と文／原田 正史

次の日、即ち六月九日（日）には、本州最北東端の竜飛岬を目指すこととしました。先ず弘前駅からバスで津軽半島を北上し、私鉄津軽鉄道の始発駅がある五所川原に向かいました。津軽鉄道は昔、森林鉄道として開発されたもので、五所川原と終点中里駅との区間、二〇・七㎞を四十五分で走るローカル線です。

出発まで約五十分の時間があったので、線路を越えて駅周辺の小道を歩きました。北国というのにポカポカ陽気で暖かく、快適な気候でした。土手には真っ白な房状の花をつけたアカシアの枝がたれ下がり、ほのかに匂う甘い香りを漂わせていました。道端に見られるフキやイタドリは、西日本のものよりかなり大きく、別種だと思われます。また私たちの土地では山地でしか見ることのないフキやイタドリが、住宅地にも分布自生している姿は、〝所変われば品変わる〟そのものであり、全く予定外であったこの散策の価値を更に高めたものと考えます。

五所川原駅ではＪＲ五能線と津軽鉄道の駅舎が並べて建てられていて、自由に行き来できるようになっていました。改札口から跨線橋を渡ってＪＲの線路を越えた向こう側に津軽鉄道の小さなプラットホームがあり、二両連結の黄色い列車が待っていました。この時の乗客はわずかであり、立派な体格の若い案内係の女性が、私たちをよそ者と見たのでしょう、満面の笑みをたたえて近づいて来られました。頂いた名刺には小枝美智子と記されていました。本日中に倉敷に帰ると言う私たちの計画を見た小枝さんは、竜飛岬行きは時間的に無理ですとおっしゃり、東北新幹線の始発駅であり、同時に北海道新幹線の終着駅でもある奥津軽の今別駅を目指す新たな計画書を作ってくださいました。この計画書には帰路についても使用交通機関と、その始発時間や到着時間などの必要事項の一切が書き込まれていました。

偶然のことながら、このような親切な方にお会いできたのは非常に有り難いことでした。話をしていたら小枝さんが大変な歴史好きだと分かり、弘前では持参した拙著を渡す相手が見つからず弱っていたのですが、これで拙著も面目を失わずにすみました。二冊の中の一冊に署名してお渡しし、一冊はお友達の中の歴史好きな方に差し上げてくださいとお願いしておきました。これで津軽の地にも郷土最大の英傑・相良清兵衛殿に対する正しい理解が深まり、それによって清兵衛殿に対する敬愛の念が根づくことを期待したいものです。

津軽鉄道五所川原駅舎風景（2018, 原田）

津軽鉄道では冬季に運行されるストーブ列車が有名です。国内だけでなく海外からの観光客も多く、中には毎年参加する、津軽の冬に魅せられた人もいるそうです。五所川原の駅舎には、冬季に使用された石炭ストーブが仕舞われることなく、そのまま置かれていました。沿線には太宰治のミュージアムもあり、また吉幾三の出生地も見ることが出来ました。吉幾三については、これまで全く関心がありませんでしたが、彼の顔が典型的な津軽顔であることを知り、一挙に親しみが生じました。

津軽鉄道の乗車時間は、小枝さんとの出会いがあって、あっという間に過ぎ去り、終点中里駅に到着しました。ここでお互いに手を振り合いながらお別れしました。中里駅では今別行きのバスの出発時間まで二時間近くの待ち時間があり、駅前の展示館を見学しました。ここには奥津軽の文物などが展示されているばかりではなく、数人のおばあちゃんたちによって、土産物と独り暮らしの老人たちの為の日用品が販売されていました。土産物を物色していたら、私の年齢を二回りほど見間違えたらしいおばあちゃんから、すでに孫がいる娘に、「津軽で嫁っ子に行ったら

良かんべさ」と言われ、大喜びしていました。もともと九州の山里育ちである娘と、奥津軽のおばあちゃんとは遠隔の土地であるにも関わらず気心が通じ合うものがあるらしく、すぐ打ち解けて仲良しとなり、話がはずみました。別れに際して「待っておっからヨ、また津軽さ来てくんろ」と言われました。今別行きのバスに乗ると展示館の窓越しに涙顔で手を振るおばあちゃんたちが見えました。

中里を出たバスは、段丘崖下に延びる道路を北上します。左手は海岸近くまで広がる人家のない水田地帯です。集落は、海岸近くとバスの走る道路沿いにしか存在しません。やがてバスは進路を東北東に転じ、段丘上に広がる森林地帯に入ります。しばらく走った後、東北新幹線と並走する道路に入り、北上します。段丘を抜けて平地に入ると、今別地域となり、やっと人家が点在する風景となりました。間もなくバスは目的地である今別駅前に到着です。バスを降りると気温は15℃に低下しており、シャツ一枚の薄着である私は思わず身震いしてしまいました。襲ってくる寒気を防ぐ術はなく、目の前にそそり立つ四階建ての駅舎に飛び込みました。内部は暖房されていて一息つきました。大型のエレベーターで最上階の乗り場へ出たら、乗客は私たち二人のほかに、若い男性が一人いるだけでした。今別駅から青森駅に向かい、電車で青森空港に入りました。

ここから往路と同じく機上の人となります。プロペラ機は津軽半島を少し北上した後、反転して高度を上げ、往路と少し違う内陸部を進みます。その時でした。一面に広がる下層雲を突き破った状態で岩木山の上半部が薄青色に輝きながら出現しました。実に見事な光景であり、私には岩木山が「また来いよ」と言っているように思われました。長野県上空に入った時、雲が消え、夕日を受けた御嶽山が白煙をたなびかせているのがはっきり見えました。知多半島に達したところからプロペラ機は進行方向を西に転じ、奈良盆地を越えて大阪伊丹空港に着陸しました。大阪からは新幹線で倉敷に向かい、自宅に到着したのは、午後九時半でした。

【はらだ・まさふみ／元人吉市文化財保護委員、倉敷市】

漢字遊び　時には気分転換！

漢和字典は面白い

13

鶴上寛治

器

「口」が四つもある。「口」三つの「品」が口部ならば、当然この字は【口部】でしかない。訓読みはウツワ。ゴキ（御器）は木で作ったうつわ（器）で、木地師たちがこの技術を持って全国を移動して回ったらしい。器械体操を機械体操とは書かない。なんだか動力を使っての体操に見えてしまう。器用――生身の人間の手の器用さ。便器――便機だと中の物が機械で吸い取られるような恐ろしさを感じる。

射

射撃というと、オリンピックの競技種目にもなっている銃によるものが頭に浮かぶが、弓による「射」の方が先だったはず。アーチェリーは世界的に行われているが、日本の弓道の方が歴史も古く、技術も難しそう。馬を走らせながら馬上から的を射る流鏑馬（やぶさめ）なんて芸術だ。射的場にもそれに近いものがあるが、競馬・競輪・競艇・宝くじ――などを、射倖心（しゃこうしん）とよんでいるが、いささか批判的な語調でいう。まじめに働いて…を避けて一攫千金をもくろむ〈怠け者〉と言っているみたい。株の取り引きもそれに近いかもしれない（自分は労働しなくて、濡れ手に粟で、利をつかむから）。写生大会と書いたつもりが漢字変換ミスで射精大会となっているのに気づき、大慌てで書き直したが、変換ミスにはくれぐれもご用心。

鳴

〈なく〉にも、泣・啼・哭・鳴　いろいろあり、文学者・詩人ばかりでなく、動物学者・新聞雑誌記者も、どの漢字を用いるかを選択するのに苦労する。

〈おんどりがときを告げる姿〉の象形で《①鳥獣が声を出す》だが、動物以外でも《②なる（雷鳴）③ならす（鳴子・悲鳴・鳴笛）》と広く使われる。オナラは？　これは女房ことばで、語源は〈鳴る〉からだが、ひる・へる・すかす　いろいろある。音が聞こえ、匂いが漂ってきましたか？　もしそうなったらこれは名文だ。

いや楽しんでいるのかもしれない。「鳴」は

【つるかみ・かんじ／人吉市】

天草の「五足の靴」
―「パアテルさん」と「茂助」は何処に居る⑤

冨永和信

この稿では『五足の靴』の原文から特別な部分（前稿で説明）を抜粋したものに筆者の私的愚考を加えたものである。

（二）赤間が関

―略―　帆前船は都会の女の如く、和船は田舎の百姓の如くに往来する。『船は皆活きているね。』と一人がいう、『うむ船に比べると人はまるで虫だ。』『見た所船ばかりじゃない、万物は皆活きよと叫んでるじゃないか。』『ここは歴史的の地でありながら全く歴史を撥無して現在の活動のみがある。』などと語る。茶店の女が跣足のままで酌んで出す番茶がなかなかうまい。

壇の浦町を過ぎて平家蟹を見た。B生は歩きながら一詩を作る。

うしなはれたるそのかみの
栄華や如何に。いたづらに
歯をくひしばる平家蟹』。
腕の鋏刀、色じろの
甲良に刻む、人の面、
無念のおもひ、平家蟹。』
―略―
源氏の末よ、人間よ、
わが一族ぞ海に生く
今こそしのべ、平家蟹。』
海にしあれば、人の世の
つりかはりを知らずして、
ひたすら怒る平家蟹。』
ひとたび立てば天が下
清盛の世にかへすべき
未来を想ふ、平家蟹。』

【筆者注記】

赤間が関は現在の下関で、関門海峡を往来する大小様々な船を目の前に望みながらもその昔、海峡に散った平家一族を偲びつつ五人は目的の九州入りを前に想いを馳せた。

（十一）蛇と蟇

富岡より八里の道を大江に向う。難道だと聞いた。―略―

三里か四里は来たろう。茶屋の婆に婆さんの言葉はちっとも分からぬと言うと、ああた方のいわっしゃる事も分かいまっせんと言った。婆さん子供があるかい。ありますとも。幾つだい。幾つだって大勢居るさあ。爺さんは居るのか。爺さんかね、爺さん居らっさんば、一寸んしみもなかとで御座いますたい。とやったので皆吹き出してしまった。歯抜け婆さんの愛嬌のあることよ。

―略―

【筆者注記】

五人の大江村への歩き旅は続く。当時のことであるから大変である。その途中、大きな蛇が蟇を呑み込もうとしているところに出くわして都会連中はびっくり仰天する。しかし一人が弱きをたすける義侠心を出し、蛇にめがけて石を何回も投げつけて蟇を助ける。しかし石投げI生を除いて他の四人はくわばらくと遠方に逃げて見守っている。若者は腰抜けであったかどうかは分からない。

（つづく）

【とみなが・かずのぶ／山口市】

五人づれ 著『五足の靴』（2007 年、岩波文庫）

生誕450年記念
書き下ろし

小説・相良清兵衛 ⑨

山口啓二

【前回までのあらすじ】父休矣の後を継いだ清兵衛は、藩内の本格的な基盤整備を進めていった。そして時々思い返すのはかつての朝鮮出兵のことであった。

「相良殿、相良頼房殿」

秀吉の居る八代屋敷は急普請で誂えたらしく、まだ木の匂いが漂い真新しい柱や廊下が目に付いた。案内の小姓に続いてそこを渡り奥へと進むと、廊下の両袖にはお目通りを願う各地の武将達で一杯であった。尊敬のまなざしで見られながら更に奥の広間に着くと、そのさらに高い位置に関白殿下秀吉公がきらびやかな衣装をまとい座していた。一行は殿下の座る間の手前でひれ伏してあいさつをした。

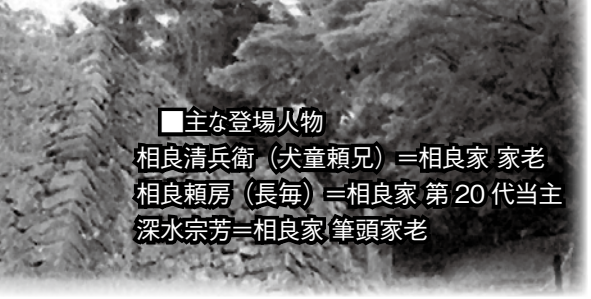
「おお相良、早速わしのところへ参るとは誠に神妙、そのうえ今日は島津衆の首を持参したそうじゃのう。ご苦労な事であった。先日申し付けた通り球磨の領地は安堵いたすゆえ、これからもこの秀吉のために励めよ」

「早速御尊顔賜り、誠に恐悦至極にござりまする。この度は我が相良家領地を安堵賜り有り難き幸せ、頼房、関白殿下さまに更なる忠勤をお誓い申しあげます」

「うん、若くしてなかなか忠義、さすがは南籐相良家の世継ぎじゃ。わしらとは出が違うからな。これからもよろしく頼むぞ」

秀吉はその場で立ち上がって、着ていた派手な絹の陣羽織を脱ぎながら頼房公の前まで行き、その羽織を自ら頼房公に着せ、さらに挿していた懐刀を与えた。あまりの出来ごとに周りにいた豊臣の家臣も相良の一行もあぜんとした。すでに島津も和睦を申し込んでおり、これで九州はすべて制圧したという喜びからであったのだろうか。島津義久は筆頭家老の伊集院忠棟や実弟の義弘ほか二十数人の人質を差し出す申し出をしていたのだ。

するとそのまま秀吉は後ろの列でひれ伏していた軍七の前に行き、



■主な登場人物
相良清兵衛（犬童頼兄）＝相良家 家老
相良頼房（長毎）＝相良家 第20代当主
深水宗芳＝相良家 筆頭家老

「そちが治部の馬の前で直訴したという若者か。で、名は何と言う」

「ははっ、相良家家臣犬童軍七にございまする。父はここに居ります休矣にございます」

「そうかそうか、そちの行いなかなか忠義、それでこそ家臣よ。これからも御家のため、国のために尽くせよ。おお、深水も一緒であったな。それはそうと深水は連歌が上手いのだそうだな。いずれにせよ相良は名君にして良き家臣を持ち神妙である。こののちが楽しみな事じゃ」

「ははっ、恐れ多きお言葉、誠にありがとうございます。さらなる忠臣をお約束いたしまする」

「頼房、家臣あってのものだね、大事になされよ。して深水、わしはこのあと島津義久と和議の話し合いをするが、薩摩からの帰りには是非歌でも詠んでくれんか。わしも連歌が大好きな故、楽しみにしておるからのう」

「かしこまりましてございまする。しかし私も下手の横好き、さて殿下のお眼鏡にかないますやら」

ここ球磨の秋は陽が沈むと急に風が冷たく感じる。辺りはうっすらと夕闇に包まれ、相良清兵衛屋敷の庭からは名残りの虫の声が聞こえはじめていた。

「ところで御家老、今日は誠に珍しき物を持参いたしましてござる。我が家の庭先で採れた野菜、ああ、これは別段珍しくもござらぬが鍋の支度をして戴けませぬか。家内の実家より届きました物でして」

「なに、天草の加奈殿のご実家からとな。それなら海の物だとは思うが、はてなんでござろう」

清兵衛の屋敷を訪ねていた丸目入道鉄斎は、家中の者に具材を渡し鍋の支度を頼むと、また深水宗芳の昔話を始めた。さかのぼること二十年も前の事である。

天正十五（一五八七）年五月九日、やっとの思いで相良家の家督を秀吉から安堵された家老深水宗芳は薩摩川内（さつませんだい）の泰平寺（たいへいじ）を訪れ、秀吉に連歌を請われ面談する事となった。だが数日前八代でのお目通りとは異なり、浅野長政が門で出迎えて先導し、秀吉が自ら玄関で迎えるほどの待遇であった。そのあと秀吉みずから右奥の座敷に案内した。家臣一同、秀吉

が出迎えて挨拶し先導するなど聞いた事もなかったので驚いた。そのうえ宗芳をまさかの『殿』付けで呼んだ。

「さあさ深水殿、近う寄られい。そう言えば深水殿、お主西国では屈指の連歌の名士だそうだな。いやいや侮っておったわ。森から聞いてこれは異なことになったと三成や長政と話しておったところじゃった。今日はお手柔らかに頼むぞ」

「本日はお招きいただき誠にありがとうございまする。しかし森殿、殿下、西国屈指とはまた話がいささか太うなりましたな」

「いやいや、他の連中もそう申しておったぞ。ところで昨日は島津が供を召し連れて訪ねてきたが、あ奴め既に頭を丸めて出家しておった。ここに来る前に慌ててどこぞで丸めたのであろうよ。まだその恰好が少しも似合うておらなんだ。そのうえ先だっての豊後攻めの言い訳をぐだぐだとしおって。そこの庭先で平伏して命乞いをして、二十人ばかしの人質を送ると約束しよったわ。そう言えば豊後攻めには相良も島津に翻弄されてかなりの手傷を負わされたそうじゃのう。痛み入る事じゃ。さて、島津の名は何と申したかのう、治部」

「側用人がたしか、龍伯とか申しておりましたが」

「そうじゃそうじゃ、龍伯とはたいそうな名前を付けおって。ま、儂のような田舎百姓の出ではなく、鎌倉以来相良家とも同格の家柄で在るからのう。此度の事は誠にもって実に苦々しいが、

今後は豊臣家のために働くと明言したので、相良家同様一度は願いを聞いてやることにしたわ。ときに深水殿に尋ねるが、あとしばらくで日の本は天下泰平の世になるであろう。さてその先には何が見えるであろうよのう」

深水宗芳はしばし目を閉じ、そこで一首詠んだ。

「殿下、さしずめ、

『草も木も　靡き従ふ五月雨の、天の恵みは高麗百済まで』

と言うところにございましょうかな」

「おう、皆の者聞き入ったか！。深水殿は我が心をも読み取っておるぞ。さすが西国一の歌人、このうえは相良の土地全てをお主に任せたいくらいじゃが」

「有り難きお言葉誠に恐れ入ります。なれど、やはり唐攻めをなさいまするか。実はもう戦はこりごりにございまする。この先は歌でも詠み耽って余生を楽しみとうございまする」

「お主やはりそうくるか。ところでどうじゃ、さらに句を所望したいが」

「では殿下、『夏山の　梢や下枝峯の松』といきますか。

下の句を頂きとうございまする」

「なんとそう来おったか。松はわしの幼少の名の由来。さあて、どう切り替えそうぞ」

「殿下、詠みは戦のごとく難しくはございませぬ。ただ心にうつった言葉を書き准えればよろしいのです」

しばらく思案してのち秀吉の口からこう放たれた。

「成るほど……では、『雲間より来る月のさやけき』とすればいかがじゃ？」

「何とも良き句に。そう言えば今宵は良い月夜でござりまする。由巴殿も一句いかがかと」

「あいや、少し時を下され、いつも殿下のお相手ゆえ、実はかなり手を抜いておりました。さて、どうお返ししましょうぞ。『さへ行く月の影は雲らじ』なぞはいかがかと」

「おお、こちらもなかなか良き句にございまする。さすがに森由巴殿ですな」

「かたじけのうござる。どうじゃ深水殿、そなたこのまま大坂に同行なされ、関白殿下とともに連歌を楽しもうではござらぬか」

「いや森殿、殿下、御承知のとおり我が主君はまだ若輩、拙者の今の心境は『若竹も　げに直き世の始めかな』でございまする」

「そう言わずとも、森の言う通り儂と一緒に大坂へ参ろうぞ」

「殿下、お誘い誠にありがたく存じますが、拙者はここ川内より更に十五里ほど東に在る山の中の球磨に生まれ育ち、朝廷頼朝公より拝領賜ったかの地をすでに四百年もの長きに亘り治めてまいった相良の地が愛おしくてなりませぬ。特に、秋から春にかけての晴れた朝には毎日深い霧が出て、周りのもの全てが霞んで見えまするが、この朝霧が明ける頃の景色がなんとも言えませぬ。霧の深い日は、とうに昼を過ぎた頃にようやく青い空が一面に広がります。この深水宗芳、先程申した通り出来得る事ならば泰平の世にその朝霧の中で歌でも詠んで、ゆるりと余生を過ごしとうございまする」

「ほうほう、朝霧とはまた風情があってよろしかろうのう。儂が生まれた三河でも、伏見でも大坂でも朝霧を見る事は殆どなかった故、その朝霧とやら、是非とも見てみたいものよ」

「ならば是非一度お越しを。この霧、球磨は周りをすべて山に囲まれ、その真ん中に大きな球磨川が流れているからかと」

「なるほど。次に機会があればぜひ寄りたいものじゃ。そうじゃ深水殿、そちを我が連歌の師に致したいと思うが如何か。それにそうじゃ、ここ川内は島津義久にくれてやったが、佐敷

と水俣、津奈木はそちの好きにするがよかろう。しかし惜しい家来を取り逃がしたというべきか、相良が是ほどいい家臣を育て上げたと言うべきか」

秀吉はその場で佐敷・水俣の代官に宗芳を当てるとした朱印状を書き直に手渡した。それは全く異例の事であった。

「ありがたき幸せに存じまする。では今宵の月を目出て各々句を詠みましょうぞ。浅野殿も石田殿も皆さまお加わりくだされ」

「おお愉快じゃ愉快じゃ、今宵は皆で夜が更けるまで歌いを楽しもうぞ。そうかそうか、森の言うとおり深水を大坂に連れ帰り、連歌で逢瀬を楽しむのも一考かと思ったのじゃったがのう。深水殿、もう一度訪ねるが儂と一緒に大坂へ来てはくれまいか」

「殿下、誠に有り難きお言葉なれど、拙者今かの地を離れる訳には参りますまい。さしずめ、

『空蝉（うつせみ）の、羽根より軽き身を持ちて、筑紫（ちくし）良しとは如何（いかが）いふべき』

の心持ちにございまする」

「なんと、こんどはそう来たか。そちはまぎれも無き筑紫人じゃ。で、由巴、そちはなんと返す」

「殿下、私ごときに振らずとも」

「あはは、お主にも無理があるか、深水殿、さすがは西国一と言われた歌人じゃのう。なんとも愉快愉快」

それから数日経ち、島津は家久、忠元、伊集院三河忠棟など側近二十人余りの質を差し出し、相良家もまた宗芳の甥佐馬助、休矣の娘で軍七の妹鶴満女、それに二十代頼房公の弟・長誠君の三人を質として大坂へと送った。

「鶴満、長旅になるが身体には十分気を付けるのだぞ。それと、同道される佐馬助殿にもな」

「兄上もどうかお達者でお暮し下さりませ。それに私には中間の弥兵衛が供をしますのでご心配には及びませぬ。それより父上と母上をどうぞよろしくお頼みします。では行って参ります」

更に数日経った六月初旬、宗芳に佐敷と津奈木及び水俣を所領と定めた正式な朱印状が秀吉の名で届き、また同時に、球磨の全領地を相良頼房に与える朱印状も送られて来た。

その深水宗芳も秀吉が唐入りを命じる前にこの世を去った。その後秀吉は朝鮮に幾万の兵を送り、さらに明をも治めんとする無謀な画策をしてしまった。（つづく）

【やまぐち・けいじ／人吉市】

「老いらん」道中⑥

――元気に暮らす読者の〝秘術〟

高齢者の肩書きをいただきながらも好きなテニスを楽しんでおります。

目標は「元気に終活、ピンピンコロリ」。

【いしだ・ふじゆき／名古屋市名東区】

笑いと幸福感

益田啓三

「迎えに来なったばーい」

「おっ、すぐ行くでー」

私は他人を待たせるのが嫌いな性分である。よって仏のお迎えにもすぐついて行くような気がする。そこでお迎えが来た時にはルーズに待たせておけば「あの世」に行くのも少しは遅れるのではないかと考えた。

首だけをあっちこっち ストレッチ

石田藤幸

一日の生活リズムの中で、寝室・ベッド・風呂の三ケ所は、あまり動くことのない場所だが、体調を知る大切な所でもあり、常に自分流の運動を行っています。

一つ目は朝の起床前、ベッドの上で仰向けになり、手首足首のストレッチ体操を二、三分おこなう。二つ目はトイレの中、便座に座りながら頭をゆっくり右回り、左回りと首を回すストレッチ。そして三つ目は風呂の中、体を温めながら足を伸ばして、お尻から足のかかとまでを浴槽の底に密着させ、足首を前後に屈伸させます。伸ばした膝の裏側はなかなか浴槽に着きにくいのですが、膝の曲がりを伸ばすためにこのようなことをしています。

ベッド・トイレ・風呂でのストレッチを続けて体のネック（首）の部分を動かすことによって、すでに後期

仏さまも待ちくたびれて素手振りで帰っていくかも知れぬ。ただし、その後は地獄へ…とも限らない。

正月、青井阿蘇神社は初詣の長い行列が蓮池の周りを囲んだ。私はそれを横目に神社の向かいにある「高野寺」へ。そこで味岡住職による護摩祈祷を見た。護摩木が勢いよく燃え上がり、堂内は煙にけむった。住職のお経と鈴が響き、いっそう幽玄の世界である。手を合わせたが頭の中はそれこそカンボス上の空。それより祈祷の所作に興味津々。こんな所に信心の無さが分かる。バチかぶり者である。自力で浄土に行くしかあるまい。

最近は持病のギックリ腰も暴れることもなくおとなしい。老眼と薄毛は仕方がないとして、今のところ他に悪いところは無い。これから願うはやっぱKKK（コソコソころり）か、傲慢政治家による日本の行く末か。

【ますだ・けいぞう／人吉市】

方言を味わう㉖

稲留三郎の世界⑤

―『熊つれづれ咄』巻四より―

前田一洋

「むかし柳瀬龍右衛門ちゅう人がおりなしたげな。この人ァ妙な人じゃったげなが、腹かくの人をガるのという事ァなか人で、何事も堪忍堪忍する人であったげなが、ある日、今日は天気もよし菜種を揉もうや。ぬし共ァみんな早よ仕舞うて、行たて揉みおれ。おらー一寸町ィ行たてくるでー、がまん出やて揉みおれやーと言うて、分かれて行きやった」

和かな初夏のころ、菜の花も咲き終わり、菜種の収穫時になりました。柳瀬龍右衛門ちゅう人は、川辺川柳瀬の大曲り、つまり「十四人淵」の近くにある豊原さん宅のご先祖。その人となりを紹介する書出しの部分です。

「二才（ひしゃー・下男）共は六七人連れて田ァ行たてみれば、一面に菜種がへーてあるを見て、イサぎなもんなあ。さあさあ女ごども、持って来ぇ持って来ぇと言うて、男はみんな力限りに揉むうちに、誰かオイこらこら、この種ちっとづつ酒代（さかて）ぇしちゃどうじゃろうかと言うに、みんなよかろうばいと、皆同じ心になり、さあみんな包め包めと面々の肌着をにィでみんな包む。こらこら女ごども、われ共も包め包めと言うに、女ご共は肌着は持たんと言えば、われ共アへけー（ヘコ・腰巻きに）ひっ包めと言う。ゆえにみんなヘコをときて、これに包んで、みんな仕舞うておるところに、われ共だんな殿が来やるぞう、早う隠そうや隠そうやと、種がらの下にみんな入れて隠して、物食わん顔で種揉うでおるところに、龍右衛門来たりて」

さてさて、如何なる事になりにけるかや？

「おお、今年の種ァゆうでけたなあ。種がらも多か、こらァ田に踏ん込うでも、ハシャっとして出ていけんなあ。今年な焼きしィで田に振りちらかそうや。どらどら俺が焼くちゅうて、火を打って種がらに火を着くれば、おとこおなご共は、今包うで隠した肌着とヘコの焼くるを見て、泣かんばかりのつらして途方にくれて見るうちにヒャー（灰）と煙になって、下し風に従うて西方極楽浄土の仏様のようになって、四月八日のおシャカ様のごと、丸はだかとなりたり」とスッポンポン。

「何の因果でこの難儀とはなりたるものかと思ううちに、もう昼は過ぎたもう戻ろうやと言うて、みんなちぇぬうで家に戻れば、龍右衛門後返り見て、われ達アこの冷やかて裸ゃおるが、肌着はどうしたきゃーと言われ、みんな迷惑づらしておるところに、かしら二才はジダに両手をついて、今日は斯様斯様のわけで実はかくの如しと有りの儘を述ぶれば龍右衛門聞いて、それは気の毒な事をした。女ご共がヘコまで焼きしィじゃ、こらァみんな迷惑迷惑。こらこらカカァあれ共が肌着とヘコを持って来ぇと言ううちに、カカは新ィか肌着とヘコを持って出て数惣に渡す。男女共はガられてどうなる事かと心配しておれども、種盗みの事は一口も言われずとなり」。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

くまがわ学習塾 ㉑

問１　山頭火の句を 10 句書け　（例 : 焼き捨てて日記の灰のこれだけか）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）
⑥（　　）
⑦（　　）
⑧（　　）
⑨（　　）
⑩（　　）

問２　弊社（人吉中央出版社）発行の著作を５冊あげよ（例：伊勢戸明『くま春秋』）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）

問３　相良 33 観音巡礼の観音像堂を５例あげよ（例：覚井観音）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）

問４　七夕綱が残っている地域を３地区あげよ　（例：木々子）

①（　　）
②（　　）
③（　　）

問５　エンブリー夫妻についての以下の記述は正しいか。正しいときには○を間違いのときには×をつけよ　（例：夫妻は須恵村を調査した ○）

① 夫妻はその後離婚した
② 夫妻には子どもがいなかった
③ エラ夫人は 33 観音を巡礼したことがある
④ 夫妻は八代駅を利用したことがない
⑤ 夫妻はドイツ人の研究者である。そのため昭和 10 年に日本の農村を研究できた

問５　次の写真の名前を書け（ヒント：本誌 29 号）

①（　　）　　②（　　）

※答え合わせは次号でおこないます。前回の答え合わせは84頁で。

くまがわ春秋歌壇

いもご短歌会

「美しい国」と唱えし安倍総理いま目の前に恥ずべき国が
心ある大統領がいしドイツ日本にいるは心なきアベ
（ヴァイツゼッカー大統領）　柳原　三男

灼熱の青空のもと百日紅（サルスベリ）花房やさしく垂れて揺れおり
柿の実の色づきはじめちらほらと葉陰にゆれて顔を出しおり　坂本　ケイ

ゆっくりと治していこうと夫（つま）の言（げん）　かなわぬ左手つねりつつ聞く
欠席の欄に小さくマルをつけ同級会の返事を出しぬ　上田　廸子

初盆の空に広がる大花火見事さ儚さ亡き母と見る
残暑にて帰れないのか精霊蜻蛉きな臭い世を案じているや　宮川しのぶ

被爆者の無念と怒りが惻々（そくそく）と胸に沁みくる「平和の誓い」
核兵器禁止条約に触れもせで毎年同じ首相挨拶　上田　精一

おっとわっとあすび その⑳

絵と文／松舟博満

ずぐっしょとつるし柿

夏休みもきゃしまえて、あすびだれしとった所けぇ「ズクッショ・ズグッショ」鳴きがゃうったてば、だれてどまおられんめぇひなった。

ずぐっしょ（ツクツクホウシ）て云いおった蝉でおどめ「柿の食いぎゃなったぞ、熟れすぎてずぐっしょんなってつこくっぞ」ていっかせぎゃズグッショ・ズグッショて、鳴くとんごて聞こえおったで、柿の木んほぅどる蝉ん云うこっじゃって、ほんなこっじゃろうて柿ちぎりん始まった。

一番に食わるっげひなったとがボンガキでヒンポン玉ぐりゃん太さで小みんかったばってんゴマのずびゃひゃっとって甘かったいどん、種は、あたんみゃ（あたりまえ）ひゃっとったで食う所らちっとじゃった。

そっからキャアラ、こん柿きゃはじめんこら渋かったいどん熟るれば、ゴマん入って甘もぅなっおったばってんが、一時すれば渋ん戻って云いおいやいたで、こん柿はっかりゃ食うて見らんば甘かっじゃりろ渋かっじゃりろ分からんじゃったばってん、ゴマの入っとる甘かとのぬさったときにゃ、ほかん柿よまんまかった。

そん次ぎゃショウゴネとフユガキじゃったいどん、こん柿きゃいっぺんなっと霜にあたらんばんもぅは無かった。

渋柿にゃ実の長がかチンポガキ・ベンチジュウ・アカダカセ・アオダカセてあって、こん渋柿じゃアオシガキてろんつるし柿ば作っおいやいた。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

外来語から学ぶ英単語（30）……藤原　宏

コーヒー　coffee　関連語

※道具類

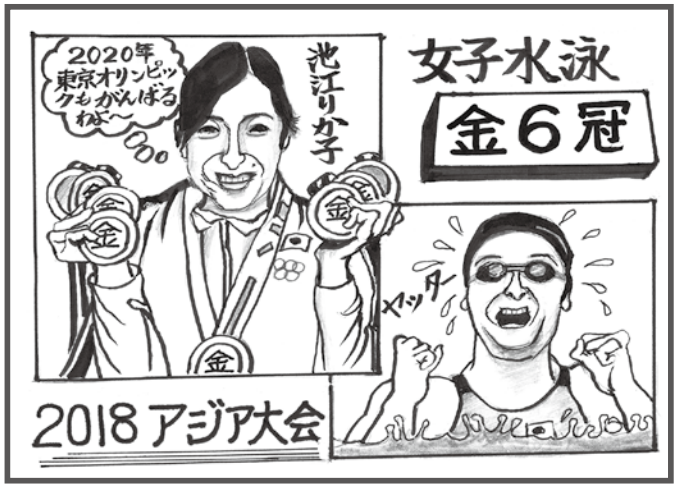
「**coffee set**（セット）、道具一式」「**coffee cup**（カップ）」「**coffee spoon**（スプーン）」「**coffee saucer**（ソーサー）、皿」「**coffee pot**（ポット）、コーヒー入れ・沸かし器」「**coffee maker**（メーカー）、コーヒー沸かし器・コーヒーを入れる人・コーヒー商人」「**coffee strainer**（ストレーナー）、コーヒー漉し器」「**coffee grinder**（グラインダー）、コーヒー挽き器」

※飲み方

「**black coffee**（ブラック）、ミルクやクリームを入れないコーヒー」「**hot coffee**（ホット）、熱湯で入れたコーヒー」「**ice coffee**（アイス）、氷で冷やしたコーヒー」「**coffee sugar**（シュガー）、通例褐色の破片状の氷砂糖」「**coffee cream**（クリーム）、脂肪分を抑えた植物性のクリーム」「**coffee float**（フロート）、冷やしたコーヒーに生クリーム・アイスクリーム・シャーベットなどを浮かべたもの」「**coffee essence**（エッセンス）、風味を出すための粉末。通例チコリの根の粉末」※ミルクコーヒー（**milk coffee**）は和製英語

(397)

ひろしの…げっかん・ぎひょう



―ジャカルタ　アジア大会の競泳女子で6冠―

なんと池江りか子選手（18）が偉業のMVPを獲得!。この力を2020年のオリンピックでも発揮してほしい。期待の星、これからも頑張ってほしい。

前号【くまがわ学習塾⑳の答え】

問１　これまでにサッカー・ワールドカップ（W 杯）が開催されたことのある都市をあげよ　（例 : 東京）

① モンテビデオ（ウルグアイ）
② ローマ（イタリア）
③ リオデジャネイロ（ブラジル）
④ チューリッヒ（スイス）
⑤ ソルナ（スウェーデン）
⑥ サンティアゴ（チリ）
⑦バーミンガム（イングランド）
⑧メキシコシティ（メキシコ）
⑨ ドルトムント（西ドイツ）※ドイツ連邦共和国の略称。同国は 1949 年 5 月 23 日～ 1990 年 10 月 2 日まで存在した
⑩ ブエノスアイレス（アルゼンチン）

問２　芥川賞受賞作家を５人あげよ（例：絲山秋子）

①（　高橋弘希　（『送り火』）　）
②（　石井遊佳　（『百年泥』）　）
③（　若竹知佐子　（『おらおらでひとりいくも』）　）
④（　沼田真佑　（『影裏』）　）
⑤（　山下澄人　（『しんせかい』）　）

問３　球磨川の支流を５河川あげよ　（例：川辺川）

①（　万江川　）
②（　山田川　）
③（　駒川　）
④（　芋川　）
⑤（　百済来川　）

問４　幕末の志士の名前を５人あげよ　（例：西郷隆盛）

①（　大久保利通（薩摩）　）
②（　桂小五郎（長州）　）
③（　坂本龍馬（土佐）　）
④（　江藤新平（肥前）　）
⑤（　宮部鼎蔵（肥後）　）

問５　次の写真の名前を書け（ヒント：本誌 28 号）

①（　霊台橋　）

②（　八代神社　）

俳句大学
Haiku University

今月の秀句
Selected Haiku of this Month

永田満徳選評・向瀬美音訳

このコーナーは、「二行書きによる〈切れ〉と〈取り合わせ〉を取り入れた Haiku」を提案している『俳句大学』facebook ページからの転載です。

https://www.facebook.com/groups/1805562046390300/

Haiku Column ⑲

Pascale Dehoux
●
Départ du fils ~
Les pales du ventilateur tournent sans fin
〔Commentaire de Mitsunori NAGATA〕
Son fils est parti en laissant le ventilateur tourner. Elle décrit précisement l'indépendance de son fils. Du côté de sa mère, inquiétude et espoir.

パスカル ドウウ
●
息子の出発
絶えず回る扇風機の羽
〔永田満徳評〕
息子の旅立ったあと、「扇風機」が息子の部屋に取り残されている情景である。子の自立への期待と不安という永遠のテーマを的確に描いている。

Agus Maulana Sunjaya
●
rainy season
dusting haiku book on the shelf
〔Commented by Mitsunori NAGATA〕
This is a good example of toriawase of kigo. Because of the rainy season, he cannot go out to get inspiration of haiku

アグス マウラナ スンジャヤ
●
梅雨
本棚の埃をかぶった俳句手帳
〔永田満徳評〕
埃を被った「俳句手帳」とは俳句を作るために吟行しようにも「梅雨」の長雨で外出できないことを意味している。季語との「取り合わせ」の見本の句である。

Isni Heryanto
●
Dad's last testimony
deep autumn
[Commented by Mitsunori Nagata]
She has a testimony of her father which is more precious than any proverb and she feels the deepness of autumn. It is a good example to trust her feelings in kigo.

イスニ ヘルヤント
●
父の最後の遺書
秋深し
〔永田満徳評〕
どんな格言よりも心に沁みる父親からの「遺言」を手にして、秋の深まりをつくづく感じているのである。作者の気持ちを季語に託した句である。

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

情報ピックアップ

21日から作品展
人吉・球磨美術連盟

絵画制作に勤しむ人たちで組織する「人吉・球磨美術（絵画）連盟」（宮村宏代表）の作品展が9月21日から24日までの4日間、多良木町の町民総合体育館で開催される。本誌など後援。

同連盟は2015年の11月、絵筆を握る愛好者が一堂に会し発足、今年は4回目の作品展となる。

演芸の面白さ・楽しさ
第11回球磨川アカデミア

人吉市でユニークな市民講座を開催している球磨川アカデミア運営委員会（主宰松本晉一）では、「芸を演じる！ 演芸の面白さ・楽しさ」と題する講座を10月27日と28日の両日、球磨郡相良村の十島神社横にある十島文庫で開催する。

今回は「見たい人、やりたい人、憶えたい人 モノまね大好き、大集合！」をキャッチフレーズに舞台演出なども手がける作家の小田豊二さんを招き、様々な演芸の世界を楽しむ。

27日の夜には芳野旅館にて「お人吉裏芸大会」、28日には演芸に関するフリートークを開催する予定。

お問い合わせは松本歯科医院（☎0966・22・2928）まで。

明治から昭和初期、肥後と球磨で繰り広げられた考古学者たちの動静を記録した白熱のドキュメント

考古学はドラマだ。

※九州内の紀伊国屋書店を中心に熊本市内の主要書店
人吉球磨の書店、Amazonで取扱い中。

■A5判／約600頁／上製本
■定価3,000円（+税）送料200円

■発行元
人吉中央出版社

インフォメーション

開催中

▽企画展「やまえのほとけ展2018」（～11月25日、山江村民俗資料館）

9月16日（日）
▽第24回全球磨少年柔道大会（多良木町体育館）

9月20日（木）
▽相良三十三観音めぐり秋の一斉開帳（～26日、人吉球磨観音35札所）

9月21日（金）
▽秋の交通安全運動（～30日）
▽第4回人吉・球磨美術（絵画）連盟作品展（～24日、多良木町町民体育館）

9月22日（土）
▽動物フェスタ2018（人吉クラフトパーク石野公園お祭り広場）

9月23日（日）
▽第14回やまえ栗まつり（山江村体育館）
▽第11回人吉医療センター病院フェスティバル（同センター）

9月29日（土）
▽くま鉄まるごとマルシェ（～30日、人吉駅前通り）
▽人吉市東西コミセン短期講座「健康体操」（同・2階会議室）
▽八代市立博物館 特別講演会「西南戦争と八代―視点を変えれば見えてくる！」講師：三澤純氏（熊本大学文学部准教授）

10月9日（火）
▽青井阿蘇神社おくんち祭り神幸行列（人吉市内）

TAKEDA Eye Clinic
たけだ眼科クリニック
院 長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの
アイ ウェア槙（まき）
（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097

デイサービスセンター いずみ
ケアプラン作成所いずみ（居宅介護支援事業所）
協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

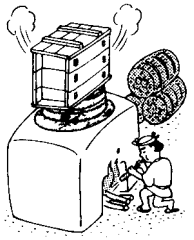
編集後記

「地震雷火事親父」ということわざは、最近の親父の権威の失墜で死語になるかと思っていたが、「山嵐（やまじ）＝台風」がいつのまにか「親父（おやじ）」に転訛したという説もあり、これに雨が加われば、まだまだ現役だと思わせる言葉である。今季の相次ぐ自然災害の恐ろしさを思えば忘れてはならない言葉であろう。★9月9日は本誌の前身である「週刊ひとよし」の創刊日、今年が20年周年だと思い、伊勢戸氏のことを含めて記録する企画を立てたが、改めて計算してみたら21年目であった。一部の方の原稿依頼に誤った数字を提示していたが、たくさんの原稿が集まった。スペースの関係で今回掲載できなかった分は来月に掲載させていただき、あわせて小社の歴史を紹介することになりそうだが、お付き合い願いたいと思う。★さて猛暑の夏も過ぎ秋の行事が楽しみになってきた。坂本町では「国際児童画展」も始まり（3頁）、人吉・球磨では相良三十三観音めぐり、青井阿蘇神社のおくんち祭りも始まる。思い切り、秋の到来を感じてみたい、と思わせる夏の終わりである。（ま）

〒868—0015
熊本県人吉市下城本町1436—4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hitoyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966・23・3759

本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

匠の枝



御膳醤油
（だし入り万能しょうゆ）
・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円（税抜）

◆みそ煎餅
477円（税抜）

◆納豆みそ
477円（税抜）

◆納豆みそ
（お徳用）
300円（税抜）

人吉散策コース 九州相良 蔵めぐり
みそ・しょうゆ蔵

合資会社 釜田醸造所
マルカマ
会長 釜田元嘉
社長 釜田顕
〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話（0966）22－3164
FAX（0966）22－3165
メール info@marukama.co.jp